



扶桑皇統記圖會
前編
二

遠
2505
13-2



遠
2505
13-2

扶桑皇統記圖會前編卷之一目錄

養老滝涌出

仲磨妻貞死條

孝子養老の滝と汲の圖

仲磨留学于唐上

於高樓餓死詠歌

安祿山等欺うとて仲磨樓上を餓死する圖

聖武天皇御受禪

満月丸主從討好根條

満月丸母の仇安倍好根と討圖

満月丸呈吉備公血書

江南子母錢の事

吉備大臣入唐

仲磨靈鬼吉備公語怨條

吉備大臣鴻臚館にて仲磨ヲ灵小あひの圖

唐帝与群臣評議

女東妻諫良入條

吉備大臣与女東圍碁

隆昌女隱黒石吉備公仁恕事

吉備公与女東棋と圍碁の圖

目錄終

扶桑皇統記圖會前編卷之二

浪華好華堂野亭参考

養老瀧湧出

仲麻呂妻貞死條

靈龜三年もれ明を四年丁巳の九月美濃國の守護人より朝廷に奏聞て曰

當國多度山とや深山より醴泉湧出其縁故を聞れいふ當國愛老郡多度

山の禁小住る小佐次と呼推夫のが生貨親小事て甚と孝心深と貪れ身小

孝艱を尽し其古の子路曾参も亦と其父年七十余才不及常小酒を好

て飯を食せと只朝夕酒を禮として歳を保ち酒あれた時餓苦といふ小佐次僅小獲

夫と産業とて家極く貧といふも身力を尽して持た其身公廉食をくし得

所の錢を尽く酒小易て又と養ひいふ妻と娶むと向孝艱小丹誠を凝して倦

かるとやせむも得る所の錢よりさる由と小飲ひる酒少れを平日愁ひ



ところ或時山深く今木を伐り小力疲るは岩頭小伏て睡眠い小頻小
酒の香鼻と穿ちるを眼を覚て其辺で見い先刺すはあやう一流の滝流れ
落其滝壺の水酒の香いと不棄其の試み手小掬で飲い水の味は甘美いと
殆も醇酒のてくい支余の不測も携り瓢小汲り家小歸りて父と飲いぬ
小父大い悦び是は是すの酒う遙小勝り醇酒と飽す飲て大い酔いふつて
小佐次深く悦び是天道より与り所あんと夫より毎日彼滝の水を汲取うて又
我娘ひいり自然を自と忘し得とるの銭を以て衣服衾小と買求め又か身を温め
倍孝心と尽し一村の者は是を傳せ我れも彼滝の水を汲取て飲い小常の水より
むと小佐次が汲取いたは美酒の味い小是余々彼が孝心と感れぬ神佛の子より
所あよ衆人小い誠小不思議の醴泉ひいり又奏聞仕りいなり天皇慶聞す
すして脚感不浅誠小孝心の徳小地下小金の釜で得永小雙の鯉で得る例

由あり其孝子の徳小因りる醴泉の湧出ハ國の祥瑞なりと勅詔しぬ美酒の
守護人小賞と賜り群臣と從て濃州多度山御幸おのひ件の滝と觀
覽すし。樵夫小佐次と召出させり滝の水を汲せて召上り小実も其美小て
常の水と異りるもの感感斜めを供奉の百官小飲しぬ皆舌舌と感
し面部手脚と洗ふ者皮膚あやう小成疾ある者疾痊愈痛ある者痛を忘れ
ぬある者疵をあらは痕治り天皇是の奇特と聞食殊感し思召小佐次を老
成銀ひしつて以て養老の滝と号し人皆小佐次が至孝と脚慶賞あつて田園
を給り其孝徳を表しぬ遂小室敷車と環されて都へ還却なりぬて后年
号と養老元年と改えり人誠小孝小百行の本小彼美詩を泉で得蓋宗
が笥と得り天其至孝と感とて子身所あり小佐次が醴泉を得しぬ日乃終
ひて名万代の龜鑑小残せり人の子も者必と孝行と必ず尊ん更なり是

ハ芽出度あり。茲又辰かゝり。安部仲九郎妻若州が身の上なり。愛子満月
 丸已小三才なり。夫仲九郎消息絶てあり。晝夜待たれて袖下涙の
 乾く間も。彼悉達太子の后妃耶愉陀羅女が太子出宮の後三年あして。羅
 睽羅尊者と生宮中。小宮篁。晝夜太子の帰りを久しき侍。紅淚不乾。汚
 りのえん。今の若州が身の上ぞ思ひ合され。憂身の上。又二層の秋心と重
 なる。其と奈何と。小安部好根ハ仲九郎唐書と。幸小苗守の郎金。歸虚誕
 乃幻を巧めて。若州江守と。購九始の裡。偽て篤実の体。わけて。年月乃
 是。小徒の漸く。不頼の本姓を露し。垂て心成け。若州と。已。側室おせんと。妻觸
 て。幻の端あり。或。色目。小。あ。せ。相。通せん。も。貞操正。九。草。何
 と。不義の爲。小。身。汚。を。辱。れ。却。て。好根。が。面。を。も。更。と。厭。い。吾。兩。公。引。せ。電。ぐ。も。不
 て。弥。夫。の。帰。朝。と。待。心。切。かり。好根。ハ。若州。が。意。小。徒。ハ。成。て。倍。淫。念。熾。かり。今

と禁。一。二。夕。大。酒。と。過。一。十。余。の。醉。兼。り。若州。が。丙。金。踏。込。對。面。と。曰。頃。日
 我。兼。て。親。く。父。の。酒。の。者。上。京。我。小。結。と。多。ハ。御。身。の。金。弟。仲。九。郎。ハ。入。唐。の。後
 唐。帝。小。仕。官。と。食。禄。と。受。妻。と。娶。り。永。く。彼。小。弟。と。り。体。たり。唐。主。り
 筑。紫。ハ。未。だ。者。より。と。り。然。我。弟。帰。朝。と。更。有。る。乎。你。帰。ら。ぬ。夫。と
 待。て。後。盛。の。花。と。つ。ら。さん。我。小。徒。ひ。て。妻。と。わり。い。ハ。後。を。甥。満。月。丸。也。我
 子。と。か。緒。養。と。教。成。長。の。後。小。安。部。の。家。名。と。相。續。さ。せ。む。と。只。出。る。俣
 小。偽。言。と。言。あ。る。を。お。け。小。口。鏡。も。若州。ハ。言。の。答。も。お。さ。ま。と。き。免。首。て。居
 々。と。好。根。猶。も。百。般。小。幻。を。尽。し。強。て。徒。ハ。せん。ま。れ。も。若州。ハ。尚。も。答。と。お。さ
 満。月。丸。と。搔。抱。て。座。と。起。ん。と。も。小。好。根。勃。と。怒。て。幾。と。袖。を。扱。て。座。邊。
 曳。居。眼。と。睜。て。曰。是。ハ。情。の。強。れ。女。の。你。が。耳。聾。た。る。も。非。也。先。刺。と。り。我。言
 幻。を。受。ぬ。妻。ハ。も。あ。ら。抑。此。家。ハ。我。俗。も。有。る。家。あ。る。及。船。守。弟。の。愛。小。船。と

聊の科を名うて我と追出。仲九家と嗣せ。更無慈悲無道の斗らひあは
 ぬ。我孝道と重んぶ。父を恨む身退。仲九入唐の折柄。我小苗守中の後見
 と附託。兄弟の義と思ひて。仕官の俸禄と捨る。家之帰。你と今日まで後
 安く暮まされ。是る小仲九唐帝の臣下とけり。帰朝せざれ。我此家を相續せ
 り。理の當然。維り是て難む者あるや。你も満月丸と便かと思ひ。我心
 従ひて。衣と俱し。満月丸が身の安穩と量る。母の慈悲ともいふ。是れ小
 夫小操立と我小背。貞節小似て。貞節ある。我此家と相續して。你母子と
 追出さむ。満月丸又の家名と嗣。更能は。是你仲九。對て不貞ある。身の
 操ハ破るとも。夫の猶小家督と嗣を。其の貞操といふ。猶此理と弁じ。我小徒
 り。古より。縁ふり。我小難面。又我小難面。你母子と追出。追
 出さむ。満月丸と目前刺殺。你ハ土牢小囚置て。生と殺。多々の苦患とん。下

如何やくと迫り。言懼。回結。若州。泣沈。声を。好根。奈
 憤り。斯程。小利害と。鏡中。小猶。從。其義。先。小兒。と。刺殺。し。れん。若州
 が。抱。たる。満月丸。が。襟。控。机。へ。引。出。さん。と。志。する。若州。殘。れ。急。ふ。其。手。を
 遮。り。留。先。哲。し。せ。更。左。程。ま。い。敷。お。ぬ。妻。を。思。ひ。給。り。を。脚。心。小。從。か
 侍。を。先。刺。り。左。右。の。答。を。進。せ。る。脚。心。の。氣。空。言。り。成。引。試。侍。り
 あり。弥。脚。心。偽。言。お。も。ん。を。今。宵。深。更。入。定。り。て。幸。多。此。丙。舎。へ。來。せ。たま
 宵。の。間。流。石。小。包。す。侍。り。言。れ。好。根。と。申。手。を。放。し。怒。り。面。を。和。け
 然。る。後。刻。も。有。り。其。時。小。否。と。言。を。満。月。と。生。る。由。殺。す。も。只。你。の。心。ハ。小
 有。必。む。契。約。と。違。る。更。か。れ。と。は。邪。智。深。れ。好。根。も。暮。暮。の。層。小。心。迷。ひ。若
 州。が。蜜。言。小。欺。る。丙。舎。と。出。て。己。が。回。を。う。る。其。後。若。州。の。涙。か。り。ま
 書。小。二。通。の。文。と。手。早。く。書。き。あ。り。て。固。封。し。平。日。意。小。合。侍。女。稻。子。と。呼。女

を密小招た私結て好根が無法の悪暮と結り今六吾身此家小居ら。若
原江守ハ先殿の忌日なりとて大安寺へ詣り何故小帰りの最遅なれ待て
高儀せよれと心せられて少時中此所は居られ。されば此寐入るる若
公懐たて後門より人の知るま小大安寺へ行江守小此文と渡してよ吾身は
道せまめしれれも二入口ぐ門を出る。監僕の異しむををれを半時むう後て
此館と忍出大安寺へ到る。江守も其由りま。彼御寺にて待べ一
道中江守が帰小逢とも大安寺へ引返して待よと告よと。満月九か衣服二
三むろり帛紗小包とて稻子の腰小結付ませ。寐ま吾子と抱れりて稻子小
渡し其寐顔とて覗き不覚溜息と落涙しれ。其涙満月九か面より忍
ち目と覚し鳴くと泣出さる。若州發し急小乳をさ付て會ませ徐小
くき透しれれ。又も急くとて寐入る。若州小声おて再び目と覚さる。内小疾

く急と急と。稻子ハ心得て二通の文を懐小。さば彼御寺にて待もん。行
時も早く。ま里のいと耳結て遠く。立出後門と潜抜て大安寺へ。後行ける
若州其後影と稍少時見送りて潜並と涙流れれ。其る。真福寺の鐘更々
と御音て三更と報むる。小鼓た守刀と取出。佛名十遍并と。白刃と抜把心下を
刺串た。遂小九泉の客と成る。哀し。す。疎かり。嗚惜。一。莖。玉芙蓉
悪鳥の為小散凋。更紅顔薄命と。是等の更と。縋ある。好根か。る
か。と。争り。知。る。宵の過酒小促されて。少時枕小倚。一。睡の。夢。を。結。る。三。更
の鐘。声。小。寝。て。眼。と。覚。今夜の更。れ。と。若州。が。待。つ。ん。と。独。言。衣。紋。刷
ら。ひ。て。若州。の。内。食。り。や。わ。る。襖。と。引。開。て。立。入。る。小。豈。量。ん。其。玉。小。串。れ
て。俯。小。伏。四。辺。と。血。小。滌。り。血。腥。た。り。限。か。れ。好。根。大。小。仰。天。雞。と。夜。れ。と。大
声。小。呼。り。る。小。寐。定。り。侍。女。音。侍。小。皆。目。と。覚。何。更。小。や。と。追。小。若



美濃の國
養老の籠
孝子酒泉
戎汲む



孝子小佐次

皇統言國會前七卷二

五

州が丙舎ま行其尻と見て大不該侍女婢女皆声を放て泣叫び男子の輩は何
 の自害せとも其状とまざれば此れとて惘果する斗けり好根は泣叫女原と吐
 懲り先刺より満月丸の足えきまふ不審何處小居や搜りんと喝令する小侍
 女婢亦涙あぐ間毎々尋まとも影もえを且侍女稲子も家内小居れ斯と好
 根小告る小僧は若州が針小て彼女が小児を抱れて退りぬめ又第原江守が大不
 寺佛緒ととま出今小於て去歸ぬも心得とも大安寺へ人をまきせ若州が尻を
 取収させぬ其強動大方もも後まうとも明小なる身より以前小安部の雜草
 第原江守の船舟が忌日小當成りて喜授所大安寺結多小法事ととて舟り
 逢食後寺僧と四方八方の物結して不思時を疑り二更の鐘小寺警れ寺僧小別と
 出で大安寺とま出脚と逸く平城とて行更半里針小て端なく侍女稲子小行令
 何也夜中女の独身と何処へ行やと訝り向小稲子小声小て如此くの更小侍り

若州が命令依を告二通の文以渡りぬ江守大不該好根が不義無道と悪
 大安寺小侍よの義あれ稲子と伴いて路引返り再大安寺へ入り叩て寺中
 へ入寺僧小巨細を語り室を借て稲子と坐せぬ其身中坐小看て先二通の文と取出
 一灯小照して表紀をよめ一通満月丸殿と有今一通江守殿と有小江守眉と
 ひそめ未だ幼れ若君の脚文と心得ぬと思ひぬ我々名當の文の封押切て續
 とも其文意ハ好根が不法の不義と云うけ承引む満月丸と害せんといふより満月
 丸ハ稲子小懐せて其針を送り吾身小操と守り今夜自害し侍り何年満月丸と
 守育我夫の歸朝より待父親小對面をまむるやと華の歩り支度路小書記
 たり江守續更一遍と大不該は是ハ如何と惘果稲子ハ若州が自害とるとの文
 と皮と等く苦く声を放てて泣伏する江守急小制しあ人や皮泣声分ると此脚文の
 封切て推量ぬ此寺小侍よと仰せぬ若君と仰せぬと館と落さぬとめり假言小

你と以て君君と我小純わがこじゆん、あつゝの御心遣あり。噂うわさ京みやこ難有列女たがひたれつにょめ、小命こいのちの死傷しやうをき進すすずとぞ悼なげまされ。多直たぢく操そうの女にょめ、小更こさら易やすり。憎にくむるは好根このね殿とのなり。先君せんくんも追出おひだり。多た程ほどの無道人むどうじんあり。主君しゆくん入唐にゅうたうののちのち後のち留守りうしゆの後見のちみを頼たのれとて来きれ。時ときも信あんが思おもひしをも。平まさく王家わがの嫡男ていとこあれ。辞いなふて。主君しゆくんの帰朝きせうあるまこと。思おもひ留置りゆうぢへ、今いま我わが過あり。彼あいつ邪人じやじん始はじめの程ほど、驚おどろく見みせ。女王ぢやうめと欺あそむ。主君しゆくん乃すなはち帰朝きせう遅おそく三年さんねんの月日つきひをす。小放こはな湯たう無頼むらいの本性ほんせいと見みし。弟あにの妻つま、小横よこ徳とく慕ぼし。心こころ小従こじゆへ、小更こさら君くんと切害せつがいせん。人ひと質しちを取とり。追おひ鏡かがみへ、女にょめ主しゆへ。幼君わらわと我わが小純こじゆんと好根このね殿とのの害がいを避よけ。其その身み節操せつさうと破やぶれ。白しろ害がいのあま好根このねへ。眼まなこ前まへ女にょめの仇あだを。今いま行いて、討取うちとり。更さら難たがひ。あまの家のかみ嫡子ていとこあれ。後のち日ひ公こうの御沙汰ごさた如何いかあ。んも量りやうり。不あま如か智ちく復仇ふくちゆうの期きと延のびし。主君しゆくんの帰朝きせう、もて待まちて。今いまの恨うらみも。成なり暗くらい。あ、此この上うへに。若君わがと守音しゆいんなる。社やしろ専せん要ようを。今いま、此この寺てらへ。て。維まもり。侍人しやくにん何なに願ねがふ。た。り。も。身み成なり思おもひて。

時節ときせつと侍人しやくにん彼好根あいつこのね主君しゆくんの家督けとくと押領おしりやうし。若君わがの所在しやうざいと搜さがし。害がいせん。と。手てに。おあ。ま。れ。を。都みやこ近ちか所ところお置進おきてすすせん。危あやし。ま。を。連つれ。乳離ちちなれも。志こころ多おほく。若君わがと抱かかり。遠とほ國くにへ。行いく。更さらも。難たがひ。かり。先まづく。手て近ちか所ところお思おもひ。て。幼君わらわの。飢うま。を。中なかつく。と。勅しやく要ようあり。や。よ。稻子いなこ今いま。泣なむ。悲かなむ。と。も。其その甲斐かひ有あり。ず。歎なげき。成なり止とどま。り。落おち。行いく。方かたと。案あんじ。出いだ。れ。と。言いは。れ。ぬ。稻子いなこよ。く。涙なみだと。ま。く。吾身わがみの。兄あにへ。平城へいじやう近ちか所ところお置進おきてすすの。里さとに。住すり。賤しやんを。農人のうじんも。正ただ直ただ律氣りつぎの。性せいあり。巨細こほらを。語かたり。て。頼たのま。む。否いなと。や。侍人しやくにん。且かつ。凡たゞ。嫁よめ。去いく。年とし。産うま。を。せ。り。由よし。あり。ぬ。其その乳ちちけ。と。分わけて。若君わが。成なり音ねと。進すすせん。如何いか侍しやくにんる。を。れ。と。い。ふ。と。江守えしゆ膝ひざと。拍うは。し。小増こぞうと。幸さいひ。有あり。守しゆ置ぢまで。五里ごり。不た足たり。路みちかり。い。ぎ。終おひ。夜よ。其その兄あに。方かたへ。行いく。と。寺僧てらそう。小礼せうらいと。述のべ。大おほ安やす寺てらと。出いで。夜道よみちの。暗くらい。と。厭いとふ。と。兩りゆう人にん。幼わらわと。守しゆて。は。置ぢの。里さとへ。剽せう。往かう。多おほく。好根このねが。下知げちを受うけ。る。武ぶ士し等ら。脚あしを。逸よく。て。大おほ安やす寺てらへ。馳かせ。り。り。門かどを。打うち。敲たたきて。東原とうげん江守えしゆや。居ゐると。向むかひ。門かど。番ばん。寐ね。惚ぼ。と。る。声こゑ。と。其その。先まづ。剽せう。剽せう。剽せう。

又、其時、各、路の違ひて逢ざるやめと。又、引返して我主の邸舎へ歸り
 斯と好根小告れむ好根心小異と。後日小尋ひ出せし中社あめとて江守稻子
 の妻先捨置家内の男女小止と。若艸病死せと披露して野辺送し。夫より
 仲九が田守手と稱し。心、安部の家督と押領し。其頃長屋王と稱す高家有此公
 天武天皇の孫小當心甚く威勢強く朝廷の御用ひ中重りたる長屋王の館へ
 之入賄賂と贈りて阿嫂ひあれ仲九唐土にて死亡せよかと心申小祈り。又時小
 満月丸の所在を尋探り。切害とて後の患成除んと巧多む。思むむれ奸悪と
 仲麻呂留學于唐土 於高樓餓死詠歌事
 却說遣唐使副使以下四艘の倭船海上障り。唐朝の開元五年丙辰五月小
 明洲の港小着船。多治比縣守藤原宇合其他判官録事以下安部仲九小
 々々位船より下て長安の都小到り。唐土の鴻臚館小入て休息し。船路の疲を

やす 胡め其後聘物と齎して王宮に到り和親の禮成演聘物と献呈せし。玄宗皇
 帝喜悅有て遣唐使の面々華清宮へ詰招せられ。仲九も倭使の
 後小従ひ帝末小着て熟坐殿中に見廻と。先正面小華清宮の三子と題せ
 一金字の額と掛屏風障子種々の彫物各五本と尺せと覺し。視目もあや小皆
 全銀珠玉小鏤り錦の帳綾の幔幕異れ。其餘の莊嚴結構心中幻
 及小ぬ許たり。諸主任小七寶の飾せ。椅子小虎皮を敷掛て。玄宗皇帝玉の
 冠と頂き蜀江の錦の袍と著し。珊瑚の笏と把て。悠々腰步懸ゆ。其左右小
 張九齡嘉許親。安祿山楊國忠以下の大臣。錦綉綾羅の朝服と著し。
 冠と平て威儀堂と列し。八眼と驚子壯觀たり。時小玄宗帝繹官と以
 日本天子の即位を慶賀せられ種々の珍宝絳帛と献進あり。其をも倭國大使副使
 由繹官小就て答禮と。是互小礼儀畢て後玄宗帝倭國の人々と沈香亭と号

別殿(侍)大(酒)宴(同)於(吹)簾(簾)有(仲)九(之)此(宮)中(之)を(看)る(華)清(宮)
より(勝)り(結)構(中)て(殿)宇(の)狂(瀟)風(流)を(首)々(珍)書(名)画(種)々(の)器(物)目(と)り
園(中)小(珍)樹(異)艸(品)の(花)咲(々)々(奇)石(怪)岩(備)々(と)物(カ)席(上)亦(金)り(香)
炉(小)如(四)雅(沈)香(を)堆(盛)て(燒)れ(て)馥(郁)々(香)氣(鼻)と(穿)ち(百)般(の)玉(器)小(山)海(の)
珍(味)と(盛)陳(ね)瑠(璃)玻(璃)の(酒)瓶(琥)珀(瑪)瑙(の)色(を)以(て)美(酒)と(勸)め(或)婢(始)々(と
美女(と)若(く)召(寄)て(妓)樂(と)奏(舞)廻(め)々(真)仙(真)の(采)花(も)是(小)争(増)る
る(と)思(む)り(半)唐(土)倭(國)の(主)客(も)百(念)と(志)心(て)樂(興)と(興)の(献)酬(と)し(て
か(り)時(小)唐(の)文(臣)張(九)齡(つ)と(仲)九(の)人(表)と(見)小(白)面(秀)目(動)止(添)小(合)英(文)
色(小)露(路)々(る)更(九)齡(多)治(比)縣(守)小(對)席(未)あ(る)若(冠)の(人)を(判)官(う)録(事)の
と(同)縣(守)答(て)彼(青)年(小)女(部)仲(た)と(呼)て(吾)朝(の)官(人)に(て)い(が)渡(唐)と(て)字(同)一
と(久)由(望)い(て)更(今)般(同)船(を)て(召)運(ハ)カ(願)く(貴)國(小)皆(く)面(めて)文(字)を(召)

給(り)い(て)白(名)九(齡)も(點)首(倭)國(より)字(葉)の(と)未(唐)せ(人)妻(と)と(之)も(彼)青
年(の)如(き)好(男)子(小)希(な)り(言)絡(動)止(不)其(俊)才(見)れ(り)予(不)敏(あ)れ(も)又(文)字(を
好(の)僻(あ)り(て)緒(史)百(家)の(書)籍(を)貯(れ)ば(予(が)館(舎)字(通)の(学)友(と)あ(り)申(と)籍(を
縣(守)怡(の)仲(九)と(招)れて(張)九(齡)と(拜)せ(せ)れ(九)齡(由)礼(と)返(し)互(小)交(り)の(厄)と(も
う(か)一(終)結(と)る(更)回(相)識(の)り(斯)て(雅)宴(數)劇(及)び(衆)人(醉)と(帶)々(不)無(盤)と(收
倭(人)も(皆)鴻(臚)館(へ)々(り(其)後(仲)九(張)九(齡)が(館)舎(小)到(り)寄(宿)と(て)書(狂)を
學(び)々(る(九)齡(是)と(教)導(示)素(より)強(記)伎(才)の(仲)九(あ)れ(一)を(回)て(予)と(知)解(悟
も(更)早(く)詩(と)賦(と)文(と)作(る)小(佳)句(妙)章(々)々(り(更(九)齡(も)每(度)驚(歎)し
是(九)庸(の)容(亦)あ(る)と(所)有(典)藉(の)温(奥)を(和)て(傳)受(し)々(斯(て)其(年)も(暮)習(ま
年)春(三)月(遣)唐(使)乃(人)々(唐)帝(小)辭(と)帰(朝)し(氣)も(仲)九(小)唐(土)を(残)り(張)九
齡(小)好(有)て(蟬)雲(の)功(と)積(學)更(い)ま(數)年(あ)る(と)頗(る)學(業)上(達)し(張

九齡の字友王摩詰。李白以下の詩人文人とも交りて結び詩文の贈答あり。其の
皆仲九の秀才と感せん。仲九の詩文も皆六望なり。只一日も早く彼人金鳥
玉免集と号取て帰朝せん。或時九齡の玉免集と号し。其の由を結ぶる。九齡の白
彼書を朝廷の秘書寮に呈して。曆官となり。亦亦の由を結ぶる。秘書監なり。其
朝廷の典籍と預る。官を授け。玉免集も看吏と得る。其の由を結ぶる。秘書監なり。其
少も及ぶ。その本も仲九の心中甚だ憂ひ。我適令入親王。王擇出。其勅命を奉
りて。此土渡り。其の玉免集と見ると。更にも能く。其の由を結ぶる。秘書監なり。其
安んじ。其の玉免集と見ると。更にも能く。其の由を結ぶる。秘書監なり。其
これをも玉免集と号し。其の由を結ぶる。秘書監なり。其
秘書監の官に到り。彼玉免集と看る。其の由を結ぶる。秘書監なり。其
臣下より度由と告げ。九齡斜め。其の由を結ぶる。秘書監なり。其

大いなる吾國の福なり。朝奉して玄宗帝。其の由を結ぶる。秘書監なり。其
て仲九の俊才と李白。其の由を結ぶる。秘書監なり。其
呼て近臣。其の由を結ぶる。秘書監なり。其
よの望もあれ。其の由を結ぶる。秘書監なり。其
去りぬ。其の由を結ぶる。秘書監なり。其
を備て足と搔心地。其の由を結ぶる。秘書監なり。其
うん。仲九大い。其の由を結ぶる。秘書監なり。其
事を祈り。其の由を結ぶる。秘書監なり。其
ふそ。仲九天。其の由を結ぶる。秘書監なり。其
さる。其の由を結ぶる。秘書監なり。其
紀下。其の由を結ぶる。秘書監なり。其

唐帝敢て免されど又官位を進めて左補闕より高官小任に命罷遇深うな
む仲九已更と得む又一年とを往らざる去程小本朝して元正天皇養老七年小
室位と皇太子豊櫻美乃皇子小天皇讓らせの御身ハ太上天皇とおせのひまが
安部仲九玉免集と借求ん入唐し己小十五年と歴をも今以て帰朝せむ何乃
音信もあらず藤原清川と遣唐大使と大野古大邑と副使と判官録事
次相添て入唐させの仲九は道と帰朝とと詔命の清川奉りて日
本の地と船中海上滞り唐王著船長安の都到り王宮参りて聘禮
首尾よく相と仲九も對面太上天皇久く待らば今度吾帰朝とる節
日船と帰るよの詔り其準備せられと告其日別て旅館と臥り其夜
仲九清川が旅館に到り對面と曰小臣天皇の勅詔奉り入唐して字向と名と
金鳥玉免集と聞せん欲とれも唐帝の秘書あれば容易小者吏能ととる小

よて仮小唐帝の臣下とかり秘書監の官に進彼秘書監取んと千苦万勞す
吏十四年停て秘書監の官と得て玉免集と看もとり朝廷の大秘録れ
ども億のち折小字一取又あらず膽小彫て暗記今ハ帰朝と唐法乃
秘決と奏聞せん唐帝小致仕を乞も敢て許されと官と進め祿と加て抑留
せざる小依已更と得む又一年の月日と送り貴卿明日唐帝小見我と日本
へ歸さるや願むらり袖中より五言律の詩一筆と把出して清川小呈り
む清川承筈と詩筆と收め翌日華清宮参りて帰朝の辞と乞ふ仲九が
詩と呈る安部仲九學問修行の事大國渡り久く留學と多々帝恩と蒙
り以て更万謝しき日本天子仲九が帰朝とる足次翹て待りて多年小て
此度臣が貴國参り小付必と仲九が辭と願ひ日船と帰朝せよとの詔命出
万望仲九と倭國へ歸りんと願ひたれと玄宗帝先詩筆と用たれ小其詩小曰

銜命將辭國 非才忝待臣 天中意明主 海外憶慈親

伏奏違金闕 駢駘去玉津 蓬萊鄉路遠 若木故園隣

西望憶恩日 東歸感義辰 平生一寶劍 留贈結交人

帝甚感感 清川不任 仲九古鄉 暮情憐 遂小歸朝

帝許 清川大不怡 仲九呼出 唐帝小拜謝 仲九淚在

流 年來鴻恩 謝 辭別 言上 去宗帝 珍器 給帛 金銀

餞別 給 斯 仲九 歸朝 願 叶 悅 勇 清川 以下 俱 小 旅

館 到 萬 准 備 綢 衆 等 長 安 發 足 明 洲 港 到 兼 仲 九

文 結 張 九 齡 魏 萬 王 維 李 白 名 士 仲 九 出 船 見 送 人 送

出 來 官 舍 高 樓 小 登 餞 別 酒 酌 列 位 時 惜 作 待 白

送秘書監還日本 王維

積水不可極 安知滄海東 九州何處遠 万里若來空

向國唯看日 歸帆但信風 鰲身映天黑 魚眼射波紅

卿樹扶桑外 主人孤島中 別離方異域 音信若為通

送日本國聘賀使晁臣卿東歸 朝 晁 通 用 包 估

上文生下國 東海是西隣 九譯蕃君使 千年聖主臣

野情偏得禮 木性本含仁 錦帆乘風轉 金裝照地新

孤城開蜃閣 曉日上車輪 早議本朝歲 塗山玉帛均

其餘略 斯 酒 宴 長 日 西 沒 月 東 天 澄 上 日 殊 更 一 天 雲 影 月 影

面 白 衆 客 眺 與 仲 九 心 中 古 鄉 三 山 之 更 思 以 家 小

殘 妻 若 艸 平 小 產 級 解 都 出 砌 別 歎 十六 年 的

春 秋 倭 國 唐 王 隔 任 收 覺 待 咄 思 彌 歸 心 胸 迫 迫 人 送

澄上月影と妻の三笠の邸舎をこぼむんとて一首の和歌と詠ト々

天のそらうきけを春日か三笠の山よ出一月うゆ

と口説たれ清川草名以下の倭人あつて感ト通秀送らむと答れども唐人亦

も倭歌と知れむ如何なる意やと向かぬ仲九漢語を以て如此くの意味なりと

詮解してせせぐるまど侍人亦も深々感ト々斯て満座酔と尽して酒宴と収め唐

人を別を告て飯り俤人船中へ枕小着るる借翌日風も好くうれむ四艘の和船纜

解て船と乗出たる仲九録事紀何某が船小兼風小仕せて大洋と走るとわが

三日むらう海上穩なるる系四日目の申の刺過俄小悪風吹起り怒浪天と浸一

大雨降出一雷電鳴ひもれ船と洶上洶下とふぞ船子も大ら躊躇た地方(乗者

んと身と揉うち四艘の大船散く小離して海上漂ひしが仲九が乗るる船ハ幸して

安南國(漂者)清川草名が船九州種が嶋へ流とる者夫より都(上り)り判官

乃船如何かや行方と知者なり斯て仲九が船安南國小着る所小此國人の

禽獸小いしく仁義と知ぬ猛惡の者ももれ大勢器械と推れて群来り船中

小疲即ち下司船子亦と来り撃殺し仲九と紀の何某兩人ハ繩ひて縛り船を

りも更なり船中の糧米衣服器物小いる迄残とち奪ひ兩人の虜と曳る

城へ歸り國手と覺れ者の前曳居る時小國王左右の者小何れ令て兩人をも

己小切書とせんともむを仲九を屬我是唐帝の近臣左補闕朝衡なり

你亦も我と書せむ後日必む唐帝の処と受殊伐を蒙るぞと言けれ彼國

王鋼刀と持者と制し兩人の縛と解者下官小命とて仲九と紀氏と國貢送

り出たる是亦依て仲九ハ危れ一命と令り再び唐朝へ歸りて歸朝の便と求む

紀氏と曰道一もぬ夷番の國と徑て多々艱難とるも紀氏ハ辛苦堪へ

終小路上へ病死たりも夫より仲九ハ独歩して唐王とさして尋行る唐朝

星流已國會前篇二

二二日

おてハ朝衙が船難風遭て覆り朝衙溺死せり風説りたり李白其死を悼して

李白

日本晁卿辭帝都

征帆一舸繞蓬壺

明月不歸沈碧海

白雲秋色滿蒼梧

と七言絶句の詩を賦して哀れ其餘の詩友も大に惜み歎れり李白其死を悼して
仲九存命して唐朝へ歸りたり皆蘇生の人逢て其無事と賀し玄宗
帝も御歡あつて再び左右侍せめり然る玄宗帝の嬖臣安禄山も倭奸
邪惡の賊臣もて揚國忠と心を拜し玄宗帝と弑して唐の代を冥へ兼て注意と
企むる仲九も略万人秀且又勇氣妻力の英雄也常帝の左右を去れり大
望の妨と思ひ煩ひたり幸ふ去年歸朝せり同士の痛を除く心地を悦びたり
今年又歸きりて帝も再勤多し安禄山大に仲九を忌思し如何申して追退

けんを邪謀と夫々々々忽ち二の奸計を案し出揚國忠を向ひ足下朝衙小逢て
如斯く鏡の如く私語を揚國忠點首して仲九も面會し足下昨年の秋歸朝せ
んと出帆せり其後街の風説り足下の船難風も覆り海底に溺死有り由專
と言觸るる也我も安禄山も大に惜み悼し不斗存命して歸れり朝廷の
幸福も我後も悦ふ不堪依て一宴を催し賀を表せんと欲せり幸ふ中秋の明
日十五音あれを凌雲臺にて足下と賀する賞月の宴を催さるる望未臨せり
まこと約を巧みと言れが仲九其奸計ある歎かむも拜謝して曰不肖の小官
と愛しめて賀酒を賜らん仰る我争う背れり明夜必ず推恭して末席を
活しめんと銘も揚國忠仕とすたりと悦び固く契約して互別を安禄山も斯と
報しめり謀成ると悦び其準備をどかふも程なり十五夜おれり女緑
山揚國忠も凌雲臺と号し高樓の酒宴の設をかり使者を以て仲九と結し大に

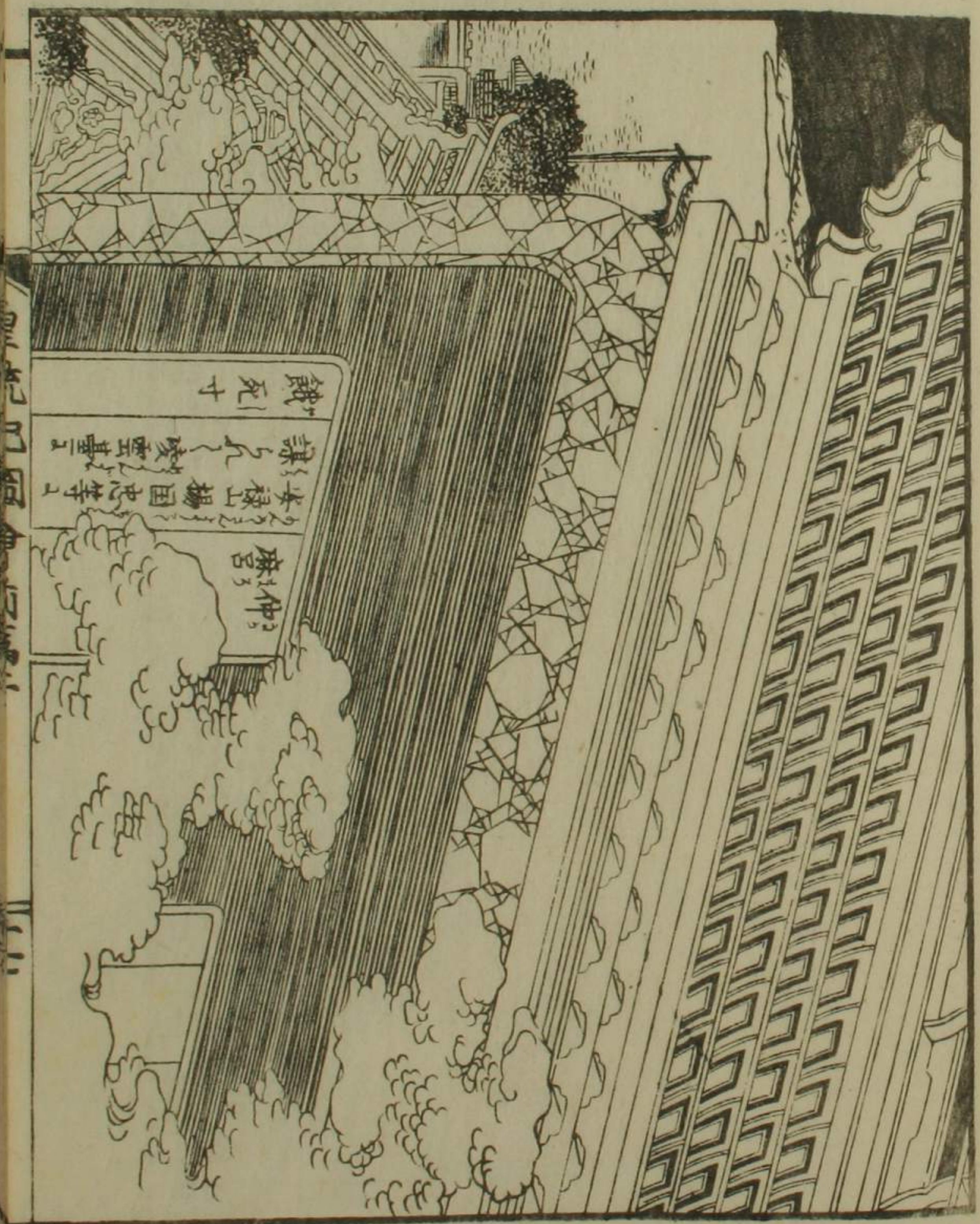
酒宴を用いた山海の珍味とて、妓樂を奏しと管侍も由仲九程の智者も
 運の来る所や、是を毒針も情と強き、休量も過る程、危と重ね、大の酔
 と帯て、勾欄小倚り、振仰て天を望む、天快く暗て、一朶の雲も、名もあ、中秋
 良夜の月山の端と放きて、高く澄昇金波眼と射て、羞明を影と、や、仲九
 暗光に向ひて、心中思々、去年明州の港、て、学友と送別の盃、取、天の原
 の歌と詠す、も、今宵の如く、暗光あり、其砌、難風小遣とて、疾、帰朝とて、此
 名月と古卿の三笠山、て、妻子と俱、小賞せん、も、尚人の圃、小憂光陰を送る
 吏と、嘆息、愁思、胸小元塞り、欄小頭と傾て、世と恨、身と悔、酒氣
 の為、小眠崩、不思、少時間、睡、秋風、吟元、吹、む、小驚、是、我、不敬を
 せりと、身と、と、席と、と、只、盃盤の狼藉、を、斗、小安、祿山、揚、國忠と、と、め
 と、其他、酒宴、侍、者、酌、と、棟、童子、居、と、其身、の、影、の、余、人、影、絶、て、無

ア、仲九、大、小、何、更、の、有、て、皆、樓、と、下、て、と、独、言、待、も、く、小、者、人、も
 登、り、ま、も、余、小、待、り、て、と、拍、鳴、或、高、声、維、彼、と、名、と、呼、も、絶、て、答、者
 も、や、く、廣、く、た、る、高、殿、小、其、身、只、人、の、を、れ、を、寂、寥、と、物、凄、點、列、銀、燭、も、漸、く、小
 消、と、も、蟬、燭、と、易、小、未、ん、も、草、れ、を、更、小、不、審、暗、を、此、上、我、も、樓、を、下、ん、と、檢、ま、て
 階、の、際、到、り、小、是、は、如、何、小、さ、も、長、き、階、と、引、て、下、る、を、便、に、大、小、孩、て
 此、方、の、措、の、方、い、く、見、小、門、く、是、も、引、く、倍、遠、く、此、所、彼、所、と、徘徊、も、更、小、下、る、
 方、便、も、な、原、未、此、凌、雲、其、臺、高、た、吏、三、十、丈、小、棟、の、薨、ハ、雲、小、冲、と、り、昔、の、樓
 成就、す、時、如、何、な、る、吏、未、と、文字、も、書、き、額、と、高、た、擔、小、掛、を、是、小、依、く
 時、の、能、書、と、春、小、入、高、額、の、際、を、釣、上、て、凌、雲、其、臺、の、三、字、と、書、せ、書、畢、て、後、春
 花、吏、却、り、小、小、毫、と、揮、人、始、髪、烏、も、小、春、と、出、る、時、小、悉、く、白、髪、と、な、り、と
 細、と、是、額、通、く、釣、上、れ、時、下、の、遙、小、遠、た、と、臨、見、心、捨、並、と、と、深、く、怖、り、小、髪



延壽神之名

延壽神之名



鐵死十

謀人 凌雲基
女 祿山 楊國忠 等

磨 仲

延壽神之名

長濱とも自ら妻せりあるる高樓、欺辱せし所、措と引れを翫かくて下らん
 中より。茲ふ於て仲九始て心付、宿安緑山揚國忠我、此高樓、賺し奪しめ
 措と引く、餓死せんとの奸計、かりきり、其も察せず、過て邪謀、陥し悔
 さよと躍り足措り、牙と咬で怒り悔も、今更施とを術も、天と仰で
 長嘆、噫非運、多ふ我、適勅命と奉りて、三余里と隔、異域、渡り、彼曆
 術の書と得ん、異國の王、膝と屈、はる更十六年、君忠を重ん、家と忘れ、妻子
 以捨、幸して沙王の秘書と心、暗記せ、千苦万勞、水の泡と消、今此樓上、小餓
 死せん、その天、余、倭國の八百萬神、仲九、苦忠と見捨、めり、身、の悲、さ
 小神、祇を怨、て、無念、の牙と啗、鳴、一、兩眼、より流、る、血、涙、ハ、二、條、の、滝、の、ごと、く、彼、古
 の、狂、の、大臣、が、燈、臺、鬼、の、耻、辱、と、受、悲、さ、も、今、身、の上、思、知、れ、恨、は、怒、つ、衣、服、を
 劈、た、其、夜、ハ、千、万、無、量、の、悲、と、泣、明、し、翌、日、ふ、あ、れ、も、樓、上、上、り、来、る、者、も、か、れ、が

独倭國の方で望み、天と鳥の羽と羨と、凋落する、絆たり、が、稍、飢、の、玉、を、れ、が
 器、皿、残、し、肉、菜、と、食、一、日、二、日、と、致、れ、暮、り、泣、明、し、果、ハ、喰、べ、物、の、あ、ら、ま
 々、れ、を、屏、風、障、子、の、紙、を、食、し、左、右、と、十、余、日、と、過、し、漸、く、小、身、軀、瘦、衰、
 氣、力、弱、し、心、神、暗、く、強、て、氣、と、厲、し、我、日、本、と、出、る、時、舍、人、親、王、の、誓、言、
 言、も、あ、り、よ、り、此、樓、上、小、飢、死、す、も、念、の、垂、垂、幽、鬼、と、な、り、再、び、曆、書、と、求、ん
 と、入、唐、と、る、人、を、補、佐、し、彼、玉、兔、集、と、倭、國、へ、渡、り、や、已、分、れ、今、ハ、空、しく、餓、死
 と、る、我、待、ち、を、も、た、く、舌、咬、断、て、相、果、あ、ん、せ、め、去、年、詠、せ、歌、と、妻、子、乃、紀
 念、小、書、目、残、と、四、辺、と、ん、ど、も、筆、墨、も、不、有、む、下、龍、襲、の、白、衣、の、袖、を、引、裂、て
 右、手、の、小、指、と、啗、切、其、血、泣、と、以、て、白、衣、の、袖、

天の原あり、さけ、見、ま、を、春日、から、三、笠、の、山、小、出、し、月、も
 と、書、終、り、遂、小、舌、と、喰、切、て、死、し、り、生、年、三、十、三、才、かり、滅、日、本、の、一、英、雄、不、幸

めて其志と遂む。望郷の思と成り。更惜む。嘆と。後小
吉備公此天の原の歌と倭國小傳へん貫之が選り古今集小曲
部小入る。月夜とある。約書と添る。慈鎮和尚も此天の
原の歌と本歌ふりて

天のそらとけ入て三笠山も低くうけて澄る月影

と縁せし又貫之の書し土佐日記の中仲九が唐主にて三笠山の月の歌と
よと載る。仲九屍を異國の土小帰し。名は倭漢書史も留り

聖武天皇御受禪 満月丸主從討好根條

却親本朝して聖武天皇養老七年小御即位まり。八皇四十五代の帝と
仰れり。脚諱は天爾國押用豊櫻彦御父文武天皇御母は藤原の夫人
と甲淡海公の女なり。養老八年二月脚即位の大禮を執行し神龜元年と

改元ある。是去年十月紀臣家より昔白色龜成献し故たり。斯て先帝元を
太上天皇と尊稱させぬ。神龜六年小改元あり天平元年より
日二年太上天皇仲九が入唐して。己ふ十四年の星霜を歴も。未だ帰朝せざる
我待り。己ふ日年小藤原清川と遣唐使として入唐させ。仲九存命あり
む。船と帰朝せし。途のひる小和三年。清川古六呂以下帰朝し。舟内
て。安部仲九をも同船し。海上にて大難風小遣臣亦船に浮て九州種島
い。仲九が乗船と録事の船。更小行方と不知いと奏聞し。當今も太
上皇も深く驚き。如斯に仲九水死せしや。又存命と。其生死量知。此上
と再び智才勝と。者之撰入唐まで。金鳥玉免集と需ませ。日本小曆道を用き
いと。舍人親王(勅詔)のひる。舍人親王勅命と奉り。帰館の上其機中。倭
方の人を維彼と勘へられ。小當時仲九が。方小劣る者。下道吉備小限れと

即ち使者を以吉備とて招れり。吉備公俄も攝政家より召る。如何なる御用
 小やと不審暗ねど。即時衣冠を改めて。使者と俱に親王の館へ奉向せられり。
 因ふ曰。吉備公此時の名真備。入唐して曆書を得。歸朝有り。後朝廷より
 吉備とりの名を賜ふ。あれも。真備とてハ婦人。見あてのや。難れとて
 始り吉備とりの名。譬言を淡海公。没後の経。存生中の名。不比等。あれど
 も。然りて。安んじ難れ。又存生中より。淡海公とつらう。

斯て吉備公泰上の由。入られ。客殿へ。清く親王對面あり。偕吉備公。仰る。
 只今招れ。ハ私の義あり。先年曆書。汝求まん。安部仲九。入唐させ。以
 所仲九。唐上。田字。とて。更十六年。依中唐帝の臣たり。遂に玉兒集。とて。暗記と
 る。更を得。遣唐使。清川。と俱に。歸朝の船。小乗。れ。海上。難風。遣仲九
 船。覆り。や。不。其生死。定。り。故。才。略。ある。者。撰。入唐。させ。仲九。生

死を同。存命。を。伴。と。歸朝。君。死。せ。を。あ。唐帝。を。彼。金
 鳥。玉兒。集。と。借。求。疾。歸。朝。させ。む。と。勅。命。り。今。般。仲九。の。如。く。年。數。と。重。う
 更。成。色。一。む。と。三。年。と。限。と。と。留。命。し。今。朝。廷。ハ。此。御。使。と。奉。り。人。者。必
 ら。卿。の。他。亦。有。る。ず。國。家。万。民。の。為。か。れ。勞。と。辞。せ。唐。主。へ。渡。り。彼。曆。書。を
 借。得。て。速。く。歸。朝。し。と。有。れ。吉。備。公。低。頭。平。身。無。能。不。才。の。臣。群。臣。乃
 中。より。御。撰。出。し。須。り。大。切。の。勅。使。と。命。じ。身。乃。大。慶。皇。不。過。と。臣
 短。才。あれ。も。彼。未。渡。り。機。不。臨。變。不。應。其。王。兒。集。と。得。て。歸。朝。仕。る。事。と
 領。掌。あり。多。う。と。舍。人。親。王。御。喜。悦。あり。茲。を。立。歸。り。隨。從。の。人。數。と。定
 出。発。と。て。御。暇。を。ま。り。吉。備。公。拜。謝。と。退。出。し。郎。食。歸。り。て。妻
 子。家。人。縁。絆。の。人。小。も。宣。旨。の。趣。を。語。り。せ。專。入。唐。の。准。備。と。急。げ。る
 且。說。仲九。の。雜。掌。第。原。江。守。ハ。王。君。の。内。室。若。艸。遺。書。の。附。託。不。應。下。侍。女

稻子と俱小満月丸と守護して平城を落北笠置ある稻子の尺が許へり。至家
 の変と結り満月丸が身の上の義と頼るる小稻子が尺の農民あれども義と知情あ
 者あれど一儀も及ばず承引て至後三人を舎藏幸小妻は去年女子と産て乳
 も餘あれど其乳を以て満月丸と育させたるふと。江守八人の心を安んじ是より其身
 も鋤鋤を採て主とも小耕し耘り稻子満月丸を守傳く行幸小嫂が縫績の業
 を扶け左右して春を送り秋と過し仲九の帰朝を待とも其風統ゆづるを却て女
 主の仇ある安部好根は長屋王の媚縮ひて朝廷の臣下の端は列り仲九の家督を押し領
 一富栄るる風を八人の入るれど。江守八無念の齒を切らう。神佛祈願とめて仲九が
 帰朝を昼夜祈とも愈帰朝の音信あや。より憂年月を暮て満月丸とふ
 十才小成々も。江守八昼の耕作の疲勞をも厭ふ。夜に手跡素續かんとを教導
 九十二才の年より弓矢劍術等と教ふる小流石仲九が風と満月丸成長ふ後以智也

履小勝也。生得聰明穎悟。手跡素向。矢及。弓矢。投。手。劍の技。中。上。達。一。不
 十六才。小。成。今。師。江。守。中。及。ぬ。事。多。れ。江。守。稻。子。も。感。愧。を。受。限。り。地。も
 多。年。待。た。れ。仲。九。も。遣。唐。使。と。し。船。と。唐。土。と。出。帆。せ。る。も。海。上。に。難。風。お。お。い
 仲。九。が。乗。船。覆。り。風。統。一。行。方。ま。た。も。ひ。て。一。定。あ。れ。ぬ。も。其。生。死。定。ま。ら。ず
 されど。江。守。八。大。事。を。失。ひ。如何。と。き。と。独。心。と。苦。む。ふ。此。頃。又。吉。備。大。臣。勅。命。小。依。て。唐
 書。と。求。ん。入。唐。あ。る。街。に。魁。歌。と。も。江。守。今。堪。る。満。月。丸。と。人。あ。れ。所。招
 外。低。声。小。告。る。兼。て。時。々。上。如。く。御。足。仲。九。公。勅。命。小。依。て。入。唐。志。の。ひ。ま。が。是。御
 身。の。未。だ。生。れ。ぬ。以。前。の。妻。中。て。早。十。六。年。の。春。秋。も。御。歸。朝。の。音。信。あ。り。却。り。去
 幸。遣。唐。使。歸。朝。の。船。小。船。と。唐。土。と。出。帆。し。海。上。に。難。風。お。遣。り。御。又。仲。九
 公。の。船。覆。り。も。又。行。方。ま。た。も。風。統。の。せ。り。然。小。依。て。吉。備。公。入。唐。の。宣。旨。蒙
 り。當。年。中。出。帆。あ。る。是。又。治。定。な。り。言。觸。し。御。身。吉。備。公。願。ひ。彼。卿

乃奴僕成くなりとも入唐して脚又の生死を同極めんとす。夫れ就脚身小日進
 二品あり今道にち字細有て包隠しむも是こそ母公の脚記念ふていと懐中
 より彼君州が末期の際小書残せし文を取出して渡りしに満月九夜先年我母
 と如何成りぬと問ふ節に病死有るとり答へて脚遺物有とも言ふもど恨れ
 と言つ。封押切て續事一遍に後述とて江守小對の此脚文の約なきは細あり
 て我とが小書を死するあり成人の後跡を懸小吊りとて書りて你の病死有るとい
 ふ此文の題にてハ自害しぬいあり事明白せよと迫りて問ふも江守ハ今更
 其時の秘傷と思ひ出さず不覺の涙ふれども相涙を揮りて後述の六理りあり
 脚病死とせし偽言にて緘ハ脚身の三身ありあり又年主君の兄好根とて無道
 入脚身の母公ハ無体乃不義を言け從ふも幼た脚身と害せんと言怖せしゆへ
 万其約のてく脚身と書り更りてと暗小稲子小脚身と懐せ其脚文と我乃脚

遺書と添ひて籠と潜出させ脚身の養育の義と愚臣小純し其身ハ節操と
 まりありや。夫れ稲子と高儀。君と此郷伴ハ進させ稲子の嫂乃乳を
 以て育進させ仲九公の脚帰朝あり。待小甲斐あれ主月主君と人小付の年
 小成りぬ母公の横死の更告進せんと思ひぬも悲し余小口外ありハ自然伯父
 好根殿の耳ハ入脚為悪き更の出来はと慮り。鮮と今日中を告知せし手出
 とい吉備公の隨從として入唐去り小付てと母公の執事好根殿を二太刀恨とむと
 と脚小脚對面ありん時母如何と問ふ小病死ありと答ふ小無念あれ。斯
 實情を明しゆかると結とるも満月九夜憤然と怒りて置る義あり何と早く
 告知せざる好根が所為にて非命の死をかりぬわも好根ハ俱小天を戴りて
 母の仇かりぬて彼が住所踏を。二太刀恨とを並出させ江守と塞りて制し止。先
 血氣ハ逸りぬよか好根今安部の家督と押領し。朝廷ハ勤仕とれハ家人も去り

いかゞを有活向ひか本意と逐々能く却て御身危く下は謀を以て
 其不意我討ふ不如と練ゆれぬ満月丸漸く逸る心と鎮ち如何と本意
 我達をなれと向江守が曰古の縁譲り身小漆とと癩病となり主の執を租ひ
 一と名。されど其謀み做ひ君由小臣も面を塗汚し身小漆衣と煙ひ小人の体小
 姿と仮装し春日野と徘徊と好根の出入を窺ひ便宜と見合せ名告うけ勝負
 かの日かるとと示く満月丸承伏し。實此計策は百一と巨細を細子片妹小
 結りて。煤泥あふて面を汚し。影を乱し。鶉衣と者と。刀と槍みまると。是は持
 夜中小生置とて平城へ赴た春日野三笠山の辺を徘徊し。専ら好根と討ふと
 担ひたる。且鏡好根は安部の家督と押領し。長屋王の吹捧ふて朝廷の公用を奉る
 身とかり。今六雅源と守心の依ふ奉動を。或日己が初老と祝せんと。同寮の輩五
 六人を招請し。宵より酒宴を催して管持し。成。江守疾く此更と探り。

是天の与ふ時節なりと悦び満月丸と議して曰好根今夜客を迎て酒宴をなれ必
 定客帰して後己中酔草臥て熟睡を遂。今六月炎暑の時なれ雨戸を鎖ひ及
 ち。涼風と迎んと欲する吏治定かり。物音の鎮る。成待て裏の堀と踰忍ひ。今
 討取ひ。と示命。郎の後門際小生寝し。内の動静とぞ窺ひ。好根。是
 成敷。少もあらず。宵より客を迎て酒宴を。妓婦小琴。曲成。細を。せ。風ひ。舞
 つませ。つ。兵と添て管待し。れ。緒客。余。念。成。志。と。て。盃。と。回。一。客。小。献。を。主。手。酬。笑
 ひ。樂。と。二。更。過。る。頃。を。酌。す。果。ハ。主。客。と。も。涙。の。ぞ。乱。醉。し。今。又。席。小。堪。と。と
 未。客。只。辞。と。告。て。浪。滄。と。と。主。帰。り。々。更。好。根。侍。女。亦。小。不。血。盤。を。収。せ。己。ハ。席。上
 小。醉。介。と。前。後。も。ま。ま。と。寝。り。々。満。月。丸。主。従。を。宵。より。刃。と。ら。ら。げ。て。成。規。ひ。々。小
 二。更。過。る。頃。を。ハ。甲。女。の。笑。語。囁。く。と。喧。々。々。東。大。寺。の。鐘。三。更。と。報。と。後。と
 寂。寥。と。と。物。音。静。まり。ぬ。今。を。家。内。の。者。も。皆。眠。る。わ。あ。い。や。思。ひ。入。と



満月丸



千々江守

仲磨のち子
 満月丸殿長
 母の仇
 好根成
 撃つ

鷹眼捨て帷子の上玉手解け。覺の一刀を帯て身と固め。江守、素り案内知る
古王の館あり。堀外の松樹を攀上り。高堀を乗踰て難あり。思入四より門の扉
哉。開れ。主を誘入。潜歩して座敷へ。往く。小茶のてく。雨戸を鎖て。好根、雷乃
いん。鼻を鳴して。熟睡を了。满月丸、江守と目と見合して。完示と。赤笑。兩人
其枕頭へ。玉膏。江守、林を裏くと踏鳴し。如何や。好根、殿眼を覺して。はげ。素
在。と。仲丸公の御智。满月丸殿なり。御母若押公。貴殿の無体の戀慕を厭
ひ自害して。果し。其仇を復さんと。此年月。膽と嘗薪。小仗て待。小時。来つて
此夜。見泰。と。更と得。起。上。太刀と合。合。と。呼。り。多。れ。好根。此。声。小。驚。馬。れ。て
岸破と。刎。起。太刀。掛。の。太刀。取。取。腰。帯。是。ハ。胡。乱。ある。仇。呼。り。若。押。ハ。我。切
害。せ。小。あ。ら。む。何。と。以。て。我。故。自。害。せ。と。り。や。と。陳。い。果。さ。せ。む。噫。卑。怯。ある。中
され。更。う。主。ある。女。君。小。不。義。言。け。無。道。人。所。詮。論。之。無。益。な。り。若。君。疾。恨

戎報し。又。と。回。も。遅。し。と。満。月。丸。公。言。の。回。答。中。及。む。守。刀。必。閃。け。斬。て。くる
ふ。と。好。根。大。怒。り。何。ぞ。太。刀。抜。合。と。結。流。一。三。合。圍。ひ。あ。が。る。者。も。出。合。よ
狼。藉。者。入。る。と。呼。り。内。小。江。守。も。太。刀。と。振。拵。し。主。を。扶。け。踏。込。く。斬。る
好。根。ハ。強。勢。の。漢。あ。れ。も。宵。の。大。酒。い。ま。醒。さ。る。上。不。意。と。代。ま。て。氣。成。逆。上。脚
透。逸。れ。眼。定。ら。む。二。人。の。敵。と。支。ふ。己。小。額。と。肩。尖。小。疵。を。負。血。汐。眼。中。小。入。り
倍。眼。力。腫。か。り。憤。殺。と。滅。多。斬。小。振。回。と。太。刀。鋒。小。江。守。も。小。鬚。小。一。所。の。疵
成。受。れ。る。此。中。屈。せ。と。切。進。め。此。時。好。根。が。家。士。三。人。并。至。人。の。呼。り。若。押。太
刀。音。小。目。と。覺。し。追。取。刀。小。て。蒐。著。見。を。主。の。好。根。二。人。の。敵。と。朱。小。威。て。圍。ひ。体。の
大。小。孩。だ。銘。抜。連。て。助。太。刀。せん。と。江。守。斯。と。う。り。好。根。ハ。満。月。丸。小。打。ま。を
と。塞。て。大。声。小。你。亦。手。と。動。き。更。勿。れ。是。ハ。唐。右。一。仲。丸。公。の。若。君。母。君。乃。仇。家
乃。仇。も。好。根。と。恨。む。一。方。り。你。亦。無。道。の。好。根。と。扶。む。真。の。主。君。の。加。勢。進。上

と呼れども。家士亦好根が新よ扶知る。新奉者あれも耳あひびど三人比く
 江戸小切てくるも。茅原大平怒り。三方小敵と受秘術と尽して闘ひつ。互小斬
 つ切れつ。俱小薄手重手と肩多る。江戸小老体の上小敷を所の手と肩ども忠義小
 凝る。太刀鋒初く己小入を切付し。入小重手と肩せれを不叶と思ひえ。主を
 捨て元来一方(逃行)る。江戸小穴猛しといも。多く乃手痺眼圍。席上小付れ
 つ。太刀と杖小喘居多る。是より前小満月丸小母の仇と復さんと大兵の好根と怖
 れど。飛鳥のてく働れて。小太刀あう好根が肩尖高股左右の腕小多くの手と肩せ
 られ。はさしとの曲者堪る。後の壁へ付る。尻居小倒と坐多ると。満月透す付合
 置けて切伏つ。透小首とを射取る。江戸小前より苦痛と忍て見居る。己小
 満月丸が首と上へ入て大平悦び。噫手柄一と。今と母君も安枕と暗し。母
 人疾く笠置(帰)り。其首と手向て母君の靈と慰め。吉備公の館へ参り入唐の隨

徒を願ひ父君小對顔更老拙ハ斯敷を所の手と肩を御供仕り。夜の明くる内
 疾く退り。と言置忽と息絶おたり。城小江戸が苦節忠列再有。下入て
 満月丸江戸が死と悼。歎けも。死骸と隠さ。暇ゆなく。涙わく。其髪を切
 取て懐中し。好根が屍の袖を引裂て首と包も。後門より出られ。追来る者も無
 り。後安く笠置(主)帰。稲子兄妹小復仇の始末と語り。右州が靈と奈
 て好根が首と手向江戸の髪と箱子の尻小預。沐浴して後思ふ。首や有る腕と
 刺る。血泣と終り。其血を以て一通の文と書。死懐中して又平城へと赴き。多る

満月丸呈吉備公血書 江南子母錢之事

却統吉備大臣入唐の用意成。整近死く。小啓足せ。其准備とせ。る。おどは
 寮の公卿一門の人より。餞別の音物と贈る。使者門前小市と。客殿小送別。乃
 賓客絶回。日く小別離の酒宴と催。館の内へと賑り。多る。或夜吉備公

未客去して後夜、稍更なる枕あり就と。つゞく入唐の事と思ひつけ、彼金
 烏玉免集、唐帝深く秘藏あるより、多に容易に得ざる事。されど今度の
 入唐こそ身の大事なり。とて深く思惟を申され、頃ハ夏の季、わが庭の
 秋草も是彼花咲出亡五夜の月影も物哀なる折しも、庭の樹蔭より怪
 しや一人の者立出吉備公の目前、庭の面も坐し、身と平伏て拜をまじふと
 大臣甚だ異しと釘を殺して、深夜此庭へ来れるも何者ぞ。狐狸の類の予
 成成心んぬの義ありと手分たせられと。太刀掛の太刀と把て、柄手とけ咎め
 られ、彼者頭と揚先逸ませぬ。我ハ変化の類ありといふ。是こそ先
 羊宜吉依て入唐し、安部仲麻呂子満月と呼ぶ者あり。又の入唐後
 出生し、伯父好根と申者又、留守中家族と欺たて家督と押領し、我
 母ハ無体の不義と申けい、母其と厭ひ、小子と家士、糸と郎を落させ、この

身ハ操と守り、百害して空くあり。いれ夫、小ハ家士侍女、ホ扶助と受て、村落
 小成人先頃母の仇、伯父好根を討て、いれ、又今、帰朝致す。此身ハ日影、おて
 成長いれ、朝廷へ給て、又の家と相續仕る。いれ、便ゆかれ所、君ハ勅命、依て入唐
 志ありと承り、何卒御見泰と申。入唐、隨從を願ひ、度思ひ、いれ、も、夢、夜、一
 身ハ、誰ハ吹、奉と頼、人、命あり。十余日、向、百、般、肝、膽、と、確、た、し、く、厨、人、の、小、者、と
 たり、貴、館、へ、参、る、便、と、得、今、夜、尊、顔、と、拜、い、たり。万、望、小、子、と、奴、僕、と、な、り、い、れ
 唐、土、へ、召、連、れ、又、仲、丸、ハ、對、面、を、給、り、を、生、世、の、鴻、思、し、る、を、く、い、れ、と、涙、と、俱、お
 ぞ、願、ひ、た、る。大、臣、中、で、步、後、た、諸、ハ、仲、丸、殿、の、賢、息、と、申。是、ハ、思、ひ、あ、く、奴、對、面、を、お
 先、く、見、し、て、辞、退、さ、る。み、強、て、席、上、呼、び、申。今、物、捨、れ、趣、た、お、て、ハ、襪、袍、乃、内
 より、左、を、と、艱、難、せ、れ、あ、る。下、幼、若、の、身、を、母、の、仇、と、復、し、尚、遠、く、唐、土、渡、り、て
 父、君、を、尋、ん、ぬ、至、孝、と、申。く、申、妙、なり。左、程、を、思、ひ、し、れ、孝、心、ハ、愛、彼、土、ハ

伴の度あれども。奈何せん已入唐の徒者。汝の奴隷まで人数を定め悉く
名を記して撰政殿言上され。御身は道せん。吏意を任せ。書信を
を父君へ贈られん。予預りて。彼土にて父君を面會せ。届け進ま。入
唐の義。思止られ。仲九殿存命あるを如何かる。故由あるも。予は伴と帰朝
一。父子の對面させ申す。予歸朝するまで。此館に居て。父子對面の期を待
い。情厚く仰る。おど満月九大の望を失ひ。偕々唐の御供。叶ひぬ。と
て愁然くと頭を低ま。稍あつ。懐中より一封の書信を取り出。入唐の御
伴。叶をい。む力及む。自ら入唐。不叶。義あり。せめて。文たり。父を呈せん
と兼て。拙れた文書。書紀置。悼ま。い。父。御對面なり。是を
届け。給り。吉備公の前。早。吉備公。満月九。幼若。其用意の
深れを感心あり。流石。仲九。子なり。封書を取上。灯を照して見。はる。不

まさしく血泣を以て表記し。其甚不審。思れ。満月九。向ひて。御身。浪く。と
筆墨も意を任せ。但し。思。昔有て。此文を血泣。書け。と。向れ。は。だ
満月九。波を浮め。流浪。困窮の身。墨の。覚。左。右。わ。い。を。れ。も
態と。血泣。書紀。三。千。余。里。の。波。濤。八。瀾。も。親。子。の。契。り。汚。せ。ど。父。乃
て。手。お。渡。い。と。思。い。血。泣。を。絞。り。書。い。たり。と。答。る。吉。備。公。安。て。落。涙。有
実。賢。も。心。付。れ。と。父。子。二。斛。の。血。脈。あ。れ。は。三。千。里。の。六。幾。億。万。里。を。隔。る
とも。父。君。の。手。お。渡。ん。吏。何。の。疑。ひ。わ。ん。漢。土。江。南。小。青。蚨。と。い。ふ。虫。有。て。最
小。子。を。生。り。人。其。虫。子。の。血。を。絞。り。取。て。錢。十。一。錢。不。塗。て。貯。置。又。虫。母。の。血。を
絞。り。取。て。別。の。錢。十。一。錢。不。塗。て。貯。置。是。を。子。母。錢。と。号。す。後。て。虫。母。の。血。を。塗
る。錢。を。以。て。市。小。出。て。物。を。買。む。其。錢。人。知。る。中。小。虫。子。の。血。を。塗。る。錢。乃。許
へ。取。回。る。と。を。古。語。ゆ。子。母。錢。成。而。患。豈。貧。哉。と。褶。り。是。母。子。一。鉢。乃

血を慕ふ故なりとぞ。御身が此血没の女も彼子母錢のどく必む仲九殿の好へ
達まじ。噫足下の孝心の深た妻此血書と以て推量る。仲九殿小面會
て渡りあむ。さこそ悦びる。然も生死不定と世上の常あり。唐王
て空しく成まじ。あむ力なり。斯く我も遠く彼土へ渡り命滅まじ。たみ
あむと。仲九殿ハ御身のでた至孝の子息あれども。三ハいまご子無れを万
一異域の土とあむ。無縁の幽鬼と成ぬ。されば再會顔が期いざ
くれども。運ふ叶ひて仲九殿も。善く帰朝せむ。其時并出度多まの
對面させぬ。心長閑待れよ。いと懇小教訓。其夜より満月丸を首
の館小寄宿させられり。

吉備大臣入唐

仲九靈鬼于吉備公語曰死心條

斯て吉備公万妻ふ。小准備調ひ多。あ。赤内在て。其旨奏聞せられぬ。

即ち帝より。舍人親王を以て唐帝小曆書と需るの勅書并小聘物ホと授け
り。又金銀絹帛と吉備公へ下され。加えあむと。天竺と。賜り。太上皇よ。も
種の賜と給り。吉備公厚く天恩と謝。なり。御暇を。うて退出あり
遂小天平五年癸酉八月三日。都と。幾足。肥前唐津へ下り。九月中。小出帆
て大洋小船と。まら。せ。小日。小追風吹て。船の行。更矢の飛。が。海上。吹
の障。む。日。年。霜。月。十日。明洲の港。小。著岸。一。夫。より。吉備大臣へ。船と
下。從者。小。前後と。敬言。護。ま。兼。て。長。安。の。都。に。到。られ。れ。唐。朝。乃。接
伴。使。駕。次。迎。へ。鴻。臚。館。へ。結。ぶ。吉。備。公。旅。館。に。て。一。兩。日。船。路。乃。疲
成。休。め。諸。接。伴。使。の。引。路。小。從。ひ。行。装。美。く。聘。物。花。麗。を。飾。り。唐。帝
の。宮。室。へ。参。内。あり。る。是。玄。宗。皇。帝。開。元。二。十。年。癸。酉。十。二。月。廿。五。日。なり。其。宗
帝。吉。備。公。と。華。清。宮。へ。結。ぶ。左。右。小。文。武。の。大。臣。と。列。て。對。面。の。り。され。ハ。吉。備。公

唐帝不拜礼、聘物と捧げて帝の安射國土の昇平と賀し、たまふ。玄宗帝
譯官と以て向ふ。古より倭國の使者、正使副使判官録事等數人あり。小
今般只一人を差越さず、不審なり。抑何の使者ありと有れば、吉備公笏と
正し。今般臣吉備日本天子の勅詔を奉り、遠く貴國へ、別の義あり。我
日本皇帝堯舜の仁徳あり、万民を撫恤し、夷母の赤子を慈むが如く。徳
澤八洲の外まで及ぶ所なり。然るも、倭國の曆法あり、民の耕種する時、過
つまわらんと。帝是を憐れ、日本の風土に適する曆書を製せんと欲し、ま
ども其據とを乞ふ書籍なり。傳承れを貴國へ、金鳥玉兒集といふ書有りて
日月辰宿の度數及び天文曆法載せりと。更なりと。依て其玉兒集と須臾
借も、もんと。臣と入唐させ、れ所なり。彼書籍、小本なり。日本曆法、兵り方民
耕作の便を得。是貴國の仁徳、遠く日本まで及ぶ理あり。仰せ願ふ、其

玉兒集と恩借なり。更と庶幾する。則吾日本皇帝の勅書、是れいとて恭く
く宣命と取出し、唐帝に捧げられ。玄宗帝把上て一覽あり。諸宣ひ、
日本王黎民の爲、曆法と與さんと。朕が國の玉兒集と需らる。更一應其理有
と。いども、彼書、大皇帝より代珍藏して大臣よりと。妄不見と。更を免
ざる。秘書あれ、即答なり。群臣と高議し。其後有無の返答あり。及ぶ
それ、造鴻臚館に滞留有。と仰る。小吉備公拜謝し。佐山公脚拜
儀の間、鴻臚館にて御答を待たむ。とて。其日、宮中へ退出し、旅館へど
歸らる。唐帝より接待使を以て、吉備公を饗養せし。山海の珍味
を、酒宴と催され。更閣て不盤を収め、接待使、退去を。吉備公、稍
酒氣と帯枕、小著んと。帳内へ入褥の上、小身を横られ。五夜十夜を過し
程、少も旅寐とあれ。懶た。いふ。増て況や、數千里の波清と。隔唐

山の地多れを睡んとこれとも魂眠む。見る物皆珍しく異國小も易くぬ物ハ鐘乃
 音の耳小細音て愈目合れを禱の上小起居り。過来一方我思續け或仲た
 生死の程心わとな。彼を想ひ是を念ひキるめ折しも何所よりとも知ざ吹来
 風小灯消んとて再明ふなり其とな凄然心地せれ首と面とて四辺と見系
 灯小背て坐する者あり。その何者やと腫と定めて其汝女とんる小白狐狩
 衣と捲乱垂る髻の上小冠と頂れ。顔色憔悴と瘦細り眼ハ星の如く口巨小
 てさも心ろげ小奇怪の者なり。尋常の人あつを愴然とて恐も強く唇氣も
 大勇の吉備公自若とて些も強む。その何者ぞ。哀なる小変化の類也。我
 旅勞の虚小乗ト障碍を為小来り。知もや平ハ神國帝王の勅命奉
 り一命と抛つて遠く這國へ渡れり。豈妖怪变化の属を怖る者か。んや疾
 く去よと言厲くすされれを其時彼者声を幾し。我敢て妖怪にあむと

今更名昔面伏おが。是とそ安部仲九が安執の亡霊おてゆと。語るゆい。朽惜き
 一條の又抑小臣舎親王の御撰と出小預り。元正天皇の勅詔小依て入唐
 一張九齡小就て書經を學び彼金鳥玉免集と関せんと望し。彼
 書ハ宝庫小秘置大臣とりんも見さる吏叶を。只秘書監の官小居る者而
 己朝廷の書籍と預れ。彼秘書とりんも見る事と得たり。なりと。秘書監
 小任せ。まん。又依小去宗帝の臣下とたり。十罪の回百辛千苦。漸く秘
 書監小任せ。望し玉免集と関し。方すの内小暗記せ。望し足て唐京
 致仕とことも敢て許され。それ心と苦むる所藤原清川大伴古大呂等
 入唐せ。又清川小頼とて漸く唐帝小仕を致し。清川小と日船と一旦此國と
 出帆せ。小天運拙く難風小遭て安南國へ漂着し。國人難と避て猪蛮の國
 へ我流浪し。辛と再び唐朝へ歸り。帰朝の便と得て。又去宗帝小仕小倭

臣安祿山といふ者兼て唐の天下を篡奪せんといひ謀を企つれ我を唐帝の左京
 在てハ己が邪謀の妨げとある我以て我を欺れ凌雲臺と号する高樓を賺し
 酒宴樂舞小氣を弛ませ我油断と勤めて衆人悉く樓と下り所を控へ
 戎運の尽ぬる悲しきハ我勢も是とあると時後れて控へ下らんと行てんれむ
 早控を及く引くる翼かくてハ下る隻能くも數日水穀を得ざるを己小餓死
 小臨し遂小舌嚙切て死しひきされも一念の靈ハ怨思とかり再び倭國より曆
 書と需めんといふ人あらず影身小添て力と助け玉兒集と得せんと其令
 待々る小貴卿渡唐といひ又我存念と達とまき期未れと儲と斯浅き
 姿と相見ふ及ひたりと涙と俱ふと語る吉備公大い致れ諸小貴所ふさる大
 難小て早幽冥の客とかりのひさるや脚物語の如く小とまきもの千苦萬勞
 水上の泡と消倭者の為小購られて自殺あつる悼りさよ倭國ふさる度ゆえ

と貴君の死生定うあざれと太上天皇臣と召入唐と金鳥玉兒集と借需め且
 仲が生死と間引存命とあるを船と歸朝せよと勅詔といひき其のあず
 出京の砌貴君の賢息満月九殿御身小母逢んといふ入唐の義と頼といひれと
 由隨後の人數と撰政治家言上せ後れを力なく入唐の望と止め予が館小寄
 宿を置り彼満月九殿とハ貴所の入唐有後小て出生あり公の内君ハ故有て
 自害といひとぞ其如此くの次第なりと好根が不義と言けけし君神ハ小
 伏満月九江守稲子小抱れてせ置置卿中て成長遂小母の仇復入唐の望と叶
 されを血書と父小渡れを頼一五と語り手文庫より彼血書と取出
 て亡靈の立則小置且やれ々ハ我疾小貴所の行方と尋ひ其書と渡進
 せんとハ思ひくも先勅書と唐帝小呈し曆書と借得て後貴所の所在を尋
 んと思惟せし思ひまき斯夢幻の面會せんといふ衣袂を涙小沾されハ亡靈

も愁^{あはれ}甚^しとて血^ち晝^ると手^て小^ことて涙^{なみだ}を流^{なが}し我^{われ}死^して悲^{かな}魂^{たま}幽^{ゆう}鬼^きとちれを劫^{がく}通^{つう}力^{りき}かて
 古^こ卿^{けい}の妻^{つま}の横^{よこ}死^し兄^{あに}好^{この}娘^{むすめ}が非^ひ義^ぎ江^え守^{しゅ}稻^{いな}子^こ忠^{ちゆう}貞^{てい}満^{まん}月^{げつ}丸^{まる}が孝^{かう}心^{しん}とて恋^{こひ}く知^ちいど
 や我^{われ}もまゝ児^{せがれ}の念^{ねん}少^{すく}と此^{この}國^{くに}を去^さるる詠^{えい}せし蜂^{はち}腰^{こし}と最^{さい}期^き小^{せう}臨^{りん}と夜^よの袖^{そで}小^{せう}血^ち書^{しよ}
 いひ。歸^き朝^{あさ}なりむり見^{けん}小^{せう}渡^{わたり}給^{たま}れと袖^{そで}の中^{なか}より衣^{きぬ}とより出^いて吉^{きち}備^び公^{こう}の前^{まへ}
 へき出^いてくれが吉^{きち}備^び公^{こう}手^て小^ことより上^{かみ}てんるる小^{せう}天^{てん}の原^{はら}の歌^{うた}と血^ち泣^{なみだ}小^{せう}と書^かく依^よる
 再三^{さんさん}吟^{ぎん}返^{へん}し心^{こころ}中^{ちゆう}小^{せう}熱^{ねつ}と歌^{うた}の意^いを考^{かんが}へて感^{かん}慨^{がい}あり天^{てん}晴^{はら}秀^{しゆ}詠^{えい}る是^{こゝ}唐^{たう}王^{わう}の
 月^{つき}を見^みて古^こ知^ち三^{さん}笠^{かさ}山^{さん}小^{せう}出^いて月^{つき}と思^{おも}ひれはぐとちされるる小^{せう}仲^{ちゆう}九^く點^{てん}首^{しゆ}某^{たが}歸^き朝^{あさ}
 せんと清^{きよ}川^{かわ}ホと明^{めい}州^{しゆう}の港^{かた}到^{いた}り小^{せう}此^{この}國^{くに}の学^{がく}友^{ゆう}送^{おく}り来^きり餞^{せん}別^{べつ}の酒^{しゆ}宴^{えん}と催^{もよほ}し待^{まち}と
 作^{さく}合^あひせし折^{せつ}中^{ちゆう}秋^{しゆう}の月^{つき}さ出^いて朗^{らう}々^々なり也^{なり}故^こ郷^{きやう}小^{せう}も此^{この}月^{つき}と妻^{さい}子^しの月^{つき}々^々んと
 思^{おも}ひ申^{まを}すてけし思^{おも}ひ練^{れん}ふて小^{せう}児^こが文^{ぶん}も血^ちとて書^かす我^{われ}歌^{うた}も又^{また}血^ち泣^{なみだ}かて書^かす又^{また}子^この
 血^ち脈^{みやく}今^{いま}夜^よ回^{わい}り逢^あひと不^ふ測^{そく}かると言^いて又^{また}雨^{あめ}と落^{おち}涙^{なみだ}くれ吉^{きち}備^び公^{こう}も其^{その}岸^{きし}に祭^{まつり}

實^{じつ}も其^{その}更^{さら}ふ我^{われ}が出^い京^{きやう}の砌^{せき}。賢^{けん}息^{しき}が其^{その}父^{ちち}と持^も斎^{さい}有^あり子^こ母^ぼ錢^{せん}乃^{なり}古^こ更^{さら}と
 思^{おも}ひ出^いて脚^{あし}子^こ息^{しき}も中^{ちゆう}夕^{しゆう}の小^{せう}果^{くわ}て今^{いま}親^{おや}子^この血^ち泣^{なみだ}乃^{なり}妻^{さい}の環^{わん}りあふ
 更^{さら}の不^ふ測^{そく}さよふあれと貴^き卿^{けい}の死^し亡^{わう}あんと思^{おも}ひさるる歸^き朝^{あさ}と此^{この}紀^き念^{ねん}と脚^{あし}子^こ
 息^{しき}傳^{でん}ふを悲^{かな}も始^{はじめ}びも志^しもあつて又^{また}落^{おち}涙^{なみだ}を催^{もよほ}されるる亡^{わう}靈^{れい}
 涙^{なみだ}と搔^かきしひ約^{やく}を改^かめり曰^い見^{けん}が義^ぎはるる小^{せう}不^ふ足^{そく}る私^し更^{さら}なり只^{ただ}緊^{きん}要^{やう}の二^に大^{だい}更^{さら}
 今^{いま}日^{にち}宮^{みやう}中^{ちゆう}小^{せう}貴^き卿^{けい}退^{たい}出^い後^ごて去^さ宗^{しゆう}帝^{てい}群^{ぐん}臣^{しん}と彼^{かの}玉^{ぎよ}免^{めん}集^{しゆ}と倭^わ國^{こく}
 の使^し者^{しや}小^{せう}借^かりや不^ふ忌^きと評^{へう}議^ぎあはし小^{せう}倭^わ臣^{しん}録^{ろく}山^{さん}が細^こるる中^{ちゆう}日^{にち}本^{ほん}土^ど肥^ひ黎^り庶^{しよ}
 豊^ゆ豆^{とう}乃^{なり}更^{さら}万^{まん}國^{こく}小^{せう}勝^{しやう}と承^{うけ}るる然^{しか}る小^{せう}秘^ひ書^{しよ}と借^かりて彼^{かの}土^ど小^{せう}曆^{れき}道^{だう}閑^{かん}けふ信^{しん}
 豊^ゆ豆^{とう}饒^{にぎ}の上^{のう}國^{こく}とあり我^{われ}唐^{たう}土^どの後^ご乃^{なり}患^{わづら}と成^{なり}るる我^{われ}と日本^{にっぽん}王^{わう}書^{しよ}信^{しん}と越^{えつ}聘^{へい}物^{ぶつ}
 を厚^{あつ}く頼^{たの}みさるる小^{せう}玉^{ぎよ}免^{めん}集^{しゆ}と惜^{おぼ}し賃^{ちん}むとんを武^ぶ勇^{ゆう}尖^{せん}た倭^わ人^{にん}怒^{いか}を獲^と
 此^{この}土^ど小^{せう}冠^{かん}せん更^{さら}も量^{りやう}くれと臣^{しん}が思^{おも}按^{あん}ふとる倭^わ國^{こく}のいまだ渡^{わたり}るる其^{その}基^{もと}と彼^{かの}



使者小田基勝を以て得を王免集に貸す。若勝更難をんを貸す。と細む。いしと田基と知る倭人身と耻て其勝得をんを逃歸りし事。と言ふ。唐帝を以て群臣実もとて基の勝負を決す。對手は四百余州。小基乃名人と呼ばる。雍州の玄東といふ者。小定や。彼を身は此土に雙あね基の上手ある。上其妻は右將軍隆梨といふ者の女。て緒技に通じ。就中基と能田夫玄東も猶勝るむ。乃の名人なり。彼女夫玄東も付從て。貴卿と玄東との基を見物。若玄東危き更あを助言して勝るとを貴卿に耻辱なせんと巧む。といふ。結も果ざる。小吉備公大に強れ。其と身の大更あ。倭國も傳へざる。田基と我争う。知る基と田といふ。王免集に貸すと拒む。田を負人更必せ。我身の進退窮りたる。彼秘書を求む。得む。屍を異國の土に埋んと。賞期し。今更驚く。をんを免れ。

我死せむ。太上皇の御望を叶ふ。且日本の耻辱を殘し。唐朝の者も小嗤笑せん。更うと。括惜れ。無念の涙ふれ。仲九の壺中。有て曰ふ。悔と。我存生の時。田基と。も覚。粗其定石。も智。且却通方。以て貴卿を助るものあり。玄東夫婦妙手。不も。恐る。小不足。唐の宮中。て基と。よと望まむ。畏る。更かく。玄東と基と。田といふ。我公の。陰身。付添基の。法を指揮し。必む。勝せ。夫田基の。起源。古舜帝。太子商。均。智を。生ぜ。めん。為。小。初。て。基と。造。て。教。と。や。黒。白。の。石。日。月。小。象。り。陰。陽。の。氣。を。表。と。石。と。圓。く。造。る。天。の。象。や。て。盤。の。方。ある。地。の。象。なり。縱。横。中。九。の。條。を。引。て。目。の。數。二。百。十。目。ある。二。年。の。日。數。を。表。せ。其。間。小。九。の。黒。点。と。盛。曼。を。星。目。と。も。又。と。勢。同。と。も。号。く。星。目。と。又。の。九。曜。星。も。准。む。号。なり。九。陽。數。の。極。り。小。て。勢。ひ。強。き。以。て。勢。數。と。い。ふ。故。小。勢。同。と。号。と。も。縉。り。其。盤。の。文。

一尺二寸あり十二月と表し石の數三百六十一月八是中三年の日數も准(白石)の
 陽(白)て登(白)る象(白)り黒(白)石(白)陰(白)めて夜(白)象(白)る故(白)黒(白)石(白)持(白)者(白)先(白)と(白)是(白)日(白)と
 夜(白)の九(白)子(白)の時(白)より始(白)る(白)以(白)て(白)り(白)諸(白)黒(白)白(白)石(白)を(白)以(白)て(白)相(白)向(白)と(白)陰(白)陽(白)應(白)對(白)の
 義(白)も(白)陰(白)陽(白)の(白)應(白)對(白)の(白)他(白)の(白)物(白)と(白)交(白)る(白)更(白)た(白)故(白)側(白)より(白)助(白)言(白)と(白)更(白)と(白)堅(白)く
 禁(白)む(白)る(白)り(白)黒(白)白(白)石(白)各(白)地(白)と(白)取(白)合(白)と(白)中(白)の(白)兩(白)月(白)有(白)と(白)生(白)と(白)云(白)斤(白)月(白)及(白)び(白)日(白)無(白)を
 死(白)と(白)是(白)世(白)界(白)天(白)地(白)萬(白)物(白)生(白)死(白)を(白)以(白)て(白)大(白)義(白)と(白)と(白)其(白)地(白)と(白)取(白)争(白)と(白)戰
 場(白)の(白)戰(白)を(白)象(白)り(白)一(白)月(白)と(白)地(白)の(白)妻(白)方(白)と(白)贏(白)と(白)少(白)た(白)方(白)と(白)輸(白)と(白)其(白)手(白)の(白)名(白)斷
 粘(白)行(白)盤(白)抑(白)綽(白)閑(白)却(白)征(白)と(白)六(白)皆(白)戰(白)場(白)の(白)約(白)を(白)用(白)ひ(白)り(白)賊(白)の(白)圍(白)基(白)活(白)物(白)は
 其(白)變(白)化(白)極(白)り(白)其(白)機(白)小(白)臨(白)と(白)變(白)小(白)應(白)ざる(白)手(白)段(白)千(白)變(白)万(白)化(白)なり(白)我(白)指(白)揮(白)の
 了(白)く(白)ち(白)む(白)唐(白)王(白)無(白)二(白)の(白)名(白)と(白)呼(白)ま(白)る(白)玄(白)東(白)なり(白)と(白)何(白)と(白)畏(白)る(白)小(白)足(白)人(白)や(白)心(白)強(白)く
 思(白)ひ(白)ぬ(白)と(白)結(白)る(白)ち(白)早(白)曉(白)の(白)鐘(白)更(白)くと(白)告(白)る(白)鶏(白)鳴(白)東(白)天(白)紅(白)を(白)報(白)ぐ(白)ん(白)亡(白)靈

と(白)お(白)驚(白)風(白)情(白)めて(白)今(白)六(白)辞(白)別(白)や(白)り(白)と(白)一(白)回(白)も(白)か(白)く(白)忽(白)ち(白)次(白)女(白)烟(白)の(白)如(白)消(白)失(白)る
 唐(白)帝(白)與(白)群(白)臣(白)評(白)議 玄(白)東(白)妻(白)諫(白)良(白)人(白)條
 程(白)を(白)夜(白)と(白)明(白)と(白)吉(白)備(白)大(白)臣(白)不(白)思(白)議(白)小(白)仲(白)丸(白)の(白)亡(白)靈(白)逢(白)其(白)憤(白)死(白)の
 其(白)名(白)の(白)盤(白)觴(白)盤(白)石(白)の(白)名(白)同(白)宮(白)中(白)の(白)評(白)議(白)の(白)始(白)末(白)小(白)の(白)道(白)微(白)細(白)小(白)の(白)と(白)り(白)と(白)も
 夢(白)も(白)現(白)も(白)弁(白)が(白)賞(白)東(白)か(白)思(白)れ(白)る(白)正(白)天(白)の(白)原(白)の(白)歌(白)と(白)血(白)汐(白)と(白)書(白)一
 衣(白)の(白)斤(白)袖(白)空(白)迎(白)お(白)殘(白)満(白)月(白)丸(白)の(白)文(白)と(白)無(白)り(白)是(白)亡(白)靈(白)我(白)危(白)難(白)と(白)助(白)ん(白)の(白)詞
 疑(白)ひ(白)あ(白)じ(白)と(白)心(白)中(白)頼(白)女(白)か(白)の(白)以(白)て(白)佛(白)名(白)と(白)唱(白)へ(白)仲(白)丸(白)の(白)跡(白)と(白)吊(白)れ(白)る(白)却(白)説(白)是(白)り
 前(白)小(白)華(白)清(白)宮(白)の(白)使(白)者(白)が(白)退(白)出(白)せ(白)後(白)て(白)評(白)議(白)なり(白)安(白)祿(白)山(白)が(白)中(白)任
 せ(白)其(白)の(白)勝(白)負(白)小(白)決(白)火(白)急(白)小(白)雍(白)州(白)の(白)玄(白)東(白)と(白)召(白)寄(白)明(白)後(白)日(白)倭(白)國(白)の(白)使(白)者(白)と(白)圍(白)其(白)勢
 勝(白)負(白)と(白)ち(白)を(白)争(白)と(白)主(白)命(白)と(白)傳(白)る(白)小(白)と(白)玄(白)東(白)敬(白)で(白)領(白)掌(白)し(白)心(白)中(白)小(白)想(白)道(白)八(白)基(白)は(白)い(白)ふ
 倭(白)國(白)へ(白)渡(白)る(白)と(白)社(白)中(白)の(白)小(白)倭(白)人(白)と(白)其(白)を(白)圍(白)と(白)の(白)勅(白)命(白)と(白)不(白)審(白)あ(白)れ(白)是(白)深(白)き(白)子

細ある妻あづ。其ハ左ハ右ハ四角殺也。知る倭人亦勝ん。と堂々交とより
 尚安と心中独笑して宮中へ退出し。飲茶して我家へ歸りたり。玄東が妻
 隆昌女朝廷より俄夫を召してハ何ぞ御用也と安ん心ゆり良人の帰る
 残待る小玄東喜悅の色と合で帰宅し。少くも少くも安ん心夫と迎へ
 奥の室へ入夫妻座定りて後隆昌女夫小向ひ今日王宮より倉平小召のひも
 如何なる御用也といひやと向れども玄東完示として曰先作も悦びハ我も火急の
 御召何の御用也と心と痛めし案の外なる勅詔して今般日本より使者小来
 吉備との者と圍碁とち勝て耻辱とて子などとの義きり抑碁ハいま
 倭國傳はる。然る其名石持使ふ。あづる倭人と碁を圍て亦勝ん。妻ハ
 赤子の腕と捨りより尚安らる。我他の技ハ疎し。とりども碁ハ幼少の
 時より好みて。今頗る妙所を自得き。れを吾國四百余州の中にて碁

小於て我ハ勝人者恐る。有るが。彼離山の碁仙あり。我ハ勝得。況
 や碁を知る倭人小於也。盤小向り二十手ある内ハ亦勝君の脚感。小頭
 リ御賞物と頂戴せんと堂々指が如と更におげ言々。隆昌女使て少時
 沈吟し。偕夫小向ひ吾夫圍碁小達し。今般の役を奉り。あづる家乃
 名譽とハす。あづる倭人と碁の亡脚輪を競る。あづる脚身の一大吏たり。兵書
 小智勇の人傑。あづる神國にて神の應護ある倭人あり。彼國ハいま
 圍碁の法傳はる。神変不測の妙術有て。碁盤小臨し。自茲其手段と知
 ま。あづるあづる。あづるあづる。あづるあづる。あづるあづる。あづるあづる。
 先年入唐せし仲た。あづるあづる。あづるあづる。あづるあづる。あづるあづる。
 高宣と授け。あづるあづる。あづるあづる。あづるあづる。あづるあづる。

使も其才機衆小勝し一人あるべし万御身一石おもては負のすのあふ其身
 乃耻辱のあす晋余川の耻なり悔ら八固く辞退しむさる更よと言々れ
 去東朝の女心お左程すくお倭人を恐るべれ我ハ敢て是を恐れず
 も文学武藝を競よの勅命おも時宜およそ辞退せざるれ其を
 知さる倭人と其を周りよの王命おれた三才の小兒とも何と辞退さる況
 や我困基の妙と極め更と知召ての勅詔おれ争う辞退ふ及んや你より
 心成勞と更勿き女あが你も基お於てハ普通の者小勝さる試ふ一石おも
 見んと其盤基等と取出夫婦盤さう向ひ隆昌女ハ黒石を取て先さうち
 一石二石と互お石を下さるれ如何く隆昌女お下を三石の黒石お心ち二ッ
 小割し是小依て再黒石を把てお小是も何と割さるわど隆昌女眉を
 擧め怪しう一石おも二石おも黒石の割ハ甚が凶兆なりと言て手と止め

て深く怪しうと去東てお笑ひ石の割る更今お陽も何と怪しむお足ん
 や取換ておまやと言々れも妻の頭を振否左おいん九基ハ天地陰陽の
 理をこめ黒石の石と交くお陰陽互お萌一陰一陽巡つて一年四季を成小
 象とるされど石小陰陽あり黒石白是なり又數お陰陽ありハ大極の象りて
 陰陽いさ分れざるわ儲二四六を偶て陰たり三五七九奇て陽也然る
 お今弟三石月の陽數不當て陰体の黒石の割ハ陽より陰を破る乃理也
 つら慮し日本小國といふ此中華より東おあうて陽國なり吾此國を
 大國おれも倭國より票當を日本お對してハ陰國なり陽の數あり弟三陰
 の黒石の割ハ以て考ま今度倭人と其の勝負と競争の六四の五五勝負
 なるお前表わすとて愁の色と面お見られ去東大いお氣色と損は是を
 思つた中條お心校た女の量見より我曠勝負の先を折更勿き夫物更

疑ひ迷ふを万吏皆疑ひく者なり是を狐疑といひて織者ハ卑しめ
笑ふ由るは一言にて我心の勇氣を撓しうと甚だ不興其を止て酒を
喫し稍酒氣を帯て去東ハ卧房ハ介れぬ妻の隆昌女ハ里石の二石を割
し心頭を煩し枕の著る百般小工夫をを回らうも其夜も早く明
たれぬ玄東起出て何是と参内の準備をあらうる唐帝より勅使事弥明
日宮中お於て倭國の使者と因基の勝負を競ふれぬ早天より参内を命じ
中渡しうるを玄東謹んで領掌勅使を見送り沐浴して待程其日暮
て當日のわたりぬれ未明より朝服を着し冠帯を履て綺羅と飾り馬小跨
り従者と持て意氣揚々と手綱握緑玉宮をさして急なる隆昌女ハ良人か
今日の基の勝負と心危く其身も潜で宮中へ参り所縁ある宦女と頼り基
の席の給仕の宦女を立雜りゆ玄東危くは是を助ん者と心中お思ひ殺け基の

始り成相待々る節婦の志をせりりりり

吉備大臣と云東園基 隆昌女隠黒石吉備公仁恵更

時小唐朝の開元二十年十一月十五日華清宮の内なる長元閣の中央の基の席を致
正面の錦帳の内小玄宗皇帝金銀珠玉を鑲めたる椅子小ゆる悠悠として其の
勝負を見物ある帝の左右小玄く皇后楊貴妃と始り官妃宦女綾羅錦綉の
袂と連紅顏翠黛花の如粧ひて並び帳外小安禄山楊國忠嘉舒觀張九
齡崔國輔以下の大臣堂々と列座し偕中央の鐵刀木の基盤を金粧と以て目を
盛る小推朱の基奇小白石百八十里石百八十と盛て基盤の上飾り白石を白
洲濱と以る海岸小産する白石と磨り銀泥と以て塗黒石ハ昆侖山小産する昌
命石と磨り盡く金泥を以て花鳥と時繪したるを二石と一環の玉を比をべき
珍名なり斯て帝宦人小命と倭使吉備大臣と結せしめらる小程か吉備の宦

人小誘引せられて入まらる。其衣冠ハ黒漆の冠威高く頂丸紫の纓を長く結
下深紅乃小袖の上小浅紫の衣と襲頭致金紗の狩衣小碧玉の石帯と締金造
乃太刀佩及し徐くと歩て殿の椅子より去宗帝ハ礼成り。列座の諸大臣も
礼を施されたる小安禄山進み出日本王金鳥王免集と借需人足下小頼乃
書と持せて此唐土ハ差越すれども彼書ハ我君家代ハ深秘の珍書あれハ
容易小他國ハ借じ。此とも日本王の需ゆき黙止さす。我國ハ囲碁と号し
一藝ある天文地理小基つて作役も戯技かり足下ハ我國の者と右の
碁と囲て能勝得らるむ其功小免と玉免集と貸与なり。勝吏能む
人を貸与ド如何碁と囲るや否やと問々吉備公心中ハ果して亡靈乃
告小違ふを思ひあがさわらぬ体て答られは思もよぬ難題か
碁といふ藝いさ日本傳らば不知技を為人やなり。さああれ戯技とあれ

席上の遊藝小て先生小拘る技も非るなり。先碁と申人を試小せて我小んせ
の二見して其法小做ひ碁と申らばとやされさむ。安禄山可笑一度二度
とも争う碁と囲む法と覚るいづくあり膽と拉られんと吉年の内官兩人と
呼出。你ハ此席小て碁と囲て倭人小見せよと指揮を内官領掌して兩人盤面
小相對し黒白の石と把て碁と申る。張九齡吉備公小教て曰凡盤面ハ世界小
象リ。戰國小別郡と取争が如く。地の多れを勝と少しを負とす。彼と勦と云是
ハ除とひ彼と却とひ是と圍とひ内官ガ亦小從ひて預め鏡史を内其ハ果
て地を造小白石の方七石の勝と感々吉備公熟と見終りて安禄山小向ひ碁乃
お法會得いせり。雅人小もあれ對手と出りて望すれはる小と安禄山心中ハ朝
そハ終小一盤の碁を見て早吞這顔こそ可笑れと独笑。然も對手を出と
召してて官人小令して玄東を呼出させられ声小應して立出る。玄東其日の装



東六羅綾の衣服の上より雀毛と織入つ絶と穿ち白玉の石帯と高く結び倫中の冠
女頂を平小象牙骨の扇子と携へ徐々と歩み出逢未席小着多れ安禄山玄東小
向ハ只今此席にて倭國の使者と其甚茲固とい倭唐土の曠勝負あると半石小ても
肩よりハ我唐朝の耻辱かり心成責て不覺をとるまふれと滅たるふと玄東唯くと
領堂一云宗帝お拜礼し頓て其甚席の椅子ふらんと吉備公一礼しれ吉備公も
答礼あを。雙方其甚司とらふ云東ハ主れを把吉備公客おれを白石を
とれ。其時女宦們珠玉の器物珍珍景を盛て捧げ出玄東ハ妻の隆昌女
も香湯と温るる瑠璃の瓶を執て立出給仕とる体にて其甚盤のわらう小在り勝
負如何と瞬もせとあめ居らう又吉備公の側ハ仲丸の亡靈影の如く女と現して
守護とれども只吉備公の月おのええ満座の人の眼おるえさうを時小玄東
肚内お思ひたるハ倭人と定めて猿智かる者と定む我手石かんで渠又我真似

を仕はせし小おまどれおあも。依て真似の出来おる妙手とおお。心巧とて
黒石を把其甚盤の中央なる星の上小丁とおお。吉備公少時勤者ありて白石を
とら。玄東がおおる黒石の上へ重ねてとおまき。傍小見物と居らる唐の臣下
是を足て思ひを吹出し。唾ととらひ。中ハ女祿山さ。出石ハさう小重ねてら
物小あらむ。其小兒の戯まてせらるやと嘲弄も。吉備公色と正し。我中重てら
物あらむ。ハ知も。先小盤ハ世界成象まらりと呼れ。然む其甚盤ハ世界の大鉢小
とて唐土とまを盤面四百余州。又日本とま。時ハ盤面六十余州。とて。お
今對手ハ盤面を唐土と。我ハ又日本とす。然る小對手盤の中央小玄宗皇帝乃御
位の石をおられ。我日本ハ聖武天皇の御位の石をおられ。地。故小唐土皇帝乃
位の上小日本天子の位の石を置けり。と此と。思。色。な。や。ま。れ。る。小。安。禄。山
及も言かり。と。思。て。閉。り。其。余。の。北。車。も。吉。備。公。の。大。膽。不。敵。の。一。言。小。拉。れ。一。言。と。並。殺

たる者もけり。宮中閑寂として暫く鳴と鎮せり。玄宗帝甚だ感しめし。倭使の
 一言理の至極なり。四方使して君命を辱めむ。是亦人のを縋る。國家の臣と
 て君事する者ハ尤斯を有る。夫亦易り。去東ハ對人ハ田其を知り。欺き由
 あれ石をちて吾國の耻辱と引出せり。早く石を引て正しくおよと。嗚呼有る小
 去東大い恐生赤面して黒石を揚ぐ。吉備公ハ白石を引き。去東改めて先
 盤の斤隅ハ初石とせられ。吉備公ハ手前の隅ハ初石を下。是より互ハ思慮を
 凝して石ニ石とせ程ハ石の勢ハ魏く連綿して星の列るが如し。是仲九乃亡靈
 吉備公助言する故かり。されも其声其姿ハ一座の人々の耳ハせえず。眼ハ
 たる倭人其を知らしと思ひ。玄宗帝と者と見物する輩士。備公の石を
 て驚嘆せむ。とりの者増て況や慢り切。去東ハ案ハ相違して對人ハ乃と先
 をち心ハ大ハ孩然。額ハ汗の玉をち。断んとおむ切ま。と腹ハ剣を柳除を

初通自在の亡靈の指揮あれ。一圓半石乃あ。手ハ互ハ五六石の端石を取
 其ハ已ハ末一段と成ふ。隆昌女ハ始より給仕ハ吏よ。双方乃石を同と賦と見
 居より。吉備公の石を悉く法ハ合ハ機変の妙手。夫去東ハ及む。許れ
 大ハ孩然。口の中ハ同義する。去東ハ二石負の体ハ。是ハ朽惜やと思。ハ
 助言する吏ハ。能く手ハ汗握つて。肉ハ其ハ早終り。拈手ハ。嗣駄目と埋。と
 隆昌女堪る。吉備公の取。黒石の端石を取。紙ハ。暗ハ。吊ハ。吞
 去東ハ。余人ハ。知され。仲九の亡靈。其と。知。吉備公ハ。知せられ。如何思。れ。人。尚。不知。負。ハ
 地を造られ。双方の地。三十。同。有。對。基。と。なり。互。勝。負。分。さ。る。も。實。ハ。白。方
 一石の勝成。隆昌女。同。義。と。早。夫。の。肩。と。知。黒。石。一。ツ。以。吞。隱。し。る。也。對。基。と。ハ
 成。る。や。り。一。座。の。君。臣。惘。果。奇。あ。ら。う。哉。い。は。倭。國。傳。は。る。困。基。と。二。度。人
 て。其。法。を。知。刺。唐。土。隨。一。乃。名。人。と。呼。れ。る。去。東。と。地。基。と。打。し。吏。不。測。と。り。申。跡。也

實も倭人之神の應護ありしるも虚統をばと或感れ又恐を亦も有る斯く
 双方石を収め内官の昔年基石を算改むる黒石一ツ不足なれ飛散し更とやと其
 あらと尋ひ捜せども更かわら若袖中へ入らばとま備公ま東と先く盤の辺小見物
 て居る人列位袖をさす懐中へ捜せども曾て無りともへ内官們首を疾め是
 と不測の更なる始め其時黒石百八十石有る小畢小暗入で二石不足有るやと
 衆議區けなり吉備公仲九の亡霊の告げて隆昌女吞隠しり然知れたる其とも
 口外をれを衆人小向ひ斯まで尋捜しふ石の無く察する小多々の石あれを算誤りあ
 るを今も拾ちたれ仰る小崔國輔頭と振否左ふあとも此基石帝の重器か
 尋常の石ありと二石とりも等閑拾置じ且又黒石今二石ありと去東八目之肩あり
 唐土の肩と成るれ一石あり拾ちて穿鑿せると倭國へ歸りて沙汰ある時ハ吾唐朝
 乃耻辱あれを決して捨置がと言ふると去東帝聞食崔國輔所理りたりと

此席不到る者去東が肩を隠さん一石を懐中へ隠すれおあともお拾ちて倭國
 の鉋鑿を受んもりろろと出を逆衣服を脱せ穿鑿せん礼儀と乱とふあれを
 石と捜し出さる器とあれ古乃扁鵲を傳し彼照病鏡を取出此席不在者も乃
 懐中へ字一尺と勅詔ありる小依官人奉り急小宝藏より件の名鏡を取出未
 り珊瑚の鏡臺小居て宮中へ飾りまは抑此照病鏡とく鏡ハ元天皇より傳来せ
 宝鏡小直二尺二寸裡九曜破軍二十八宿を鑄る表ハ明月の如く光輝れ鏡の面小
 向く者ハ衣服裝束は着るが五臟六腑を透徹りて字リ聊も隠る更あれ希代
 の宝鏡をれ扁鵲是を得て病ある者之鏡面小向させ其病何まの臟腑小有やと
 照し見て治療せよとやる奇特の靈鏡をれ代々の帝王傳り今唐帝の宝器
 とあり九重の宮小収め深く宝藏小秘置り至宝あれも今其石の移失小依て其
 隠し主を穿鑿のめ斯取出さる所なり是小依て去東を首と一座の華尺

鏡かみ向むか小こ衣い服ふく懐くわい中ちゆうハハ及およど腹はら中ちゆうの臟ちゆう腑ふまで残のこる隈かまもなく見え徹とほりなるおど
 向むか上かみ程ほどの者もの奇き異いの思おもひをみままずししる者ものも然しかども基もと石いしを覺おぼした物ものも見えどど太おほ臣みこ
 より内うち宦くわん宮きゆう女にょふふりるまで一人ひとりく檢けん者しやと受うて退ひ今いま隆りゆう昌ちやう女にょ人にんと成なるる隆りゆう昌ちやう
 女にょ六む素そり石いしを吞く隱いんせりる鏡かみ向むか小こ忽たちち更さら露ろ頭かみ我わが身みハハ更さらなり夫つま去さ東とう
 女にょも連れん座ざの罪つみ小こ陷けんり夫つま婦ふとも市いち小こ刑けいられんと思おもふ氣き臆おそし身み軀く戰せん慄れつ顔げん色しき
 如ごと来きた今いま恐おそ怖おその色いろをを表あらわす安あん祿ろく山さん隆りゆう昌ちやう女にょと去さ東とうが妻さいなりと六む知ちざんざんも彼かが
 猶なほ豫よも然しか然しか紛まりま你なん也や始はじめより基もと盤ばんのわわり小こ居ゐるれ疾はやく鏡かみ向むか小こととササるる小こ備びん
 公こうと隆りゆう昌ちやう女にょが石いしを隱いんせり更さらを知しるる深ふかた子こ細こわん更さらと去さ東とう其その罪つみの露ろ頭かみせん
 更さらと恐おそる色いろををんて心こころ中ちゆう小こ憐れんと安あん祿ろく山さん隆りゆう昌ちやう女にょ先ま刺さす種いんく基もと石いしの穿せん鑿さく金きんあると倭
 國わ乃な中ちゆうのええんん慮りのひひての更さらふふ己おのれ人ひと々々各おの鏡かみ向むか小こひひての移うつ失しせり石いしのいんんささる
 上うまま愈い美み異いりりああるる女にょ人にんの基もと石いしを隱いんせりたたもああらずず女にょ性せいハハ別べつ小こ包ほうままるる思おもふ更さら

わ有あるものあれ鏡かみ向むか小こ衣い服ふく懐くわい中ちゆうハハ及およど腹はら中ちゆうの臟ちゆう腑ふまで残のこる隈かまもなく見え徹とほりなるおど
 山さん承じやう引いんせり各おの緒しよ人ひと皆みな鏡かみ向むか小こ衣い服ふく懐くわい中ちゆうハハ及およど腹はら中ちゆうの臟ちゆう腑ふまで残のこる隈かまもなく見え徹とほりなるおど
 如ごとくやええ爾に王わうの廳てい前ぜんで淨じやう破ぱ利りの鏡かみ向むか小こ衣い服ふく懐くわい中ちゆうハハ及およど腹はら中ちゆうの臟ちゆう腑ふまで残のこる隈かまもなく見え徹とほりなるおど
 前ぜん小こ吞く隱いんしる黒くろ石いしを見み頭かみささるる知ちああるる為ため方かたなく恐おそるる鏡かみ向むか小こ衣い服ふく懐くわい中ちゆうハハ及およど腹はら中ちゆうの臟ちゆう腑ふまで残のこる隈かまもなく見え徹とほりなるおど
 明月めい月げつのく衣い服ふく懐くわい中ちゆうハハ及およど腹はら中ちゆうの臟ちゆう腑ふまで残のこる隈かまもなく見え徹とほりなるおど
 走そう退たい人にんとととと安あん祿ろく山さん隆りゆう昌ちやう女にょ胎たい中ちゆうハハ及およど腹はら中ちゆうの臟ちゆう腑ふまで残のこる隈かまもなく見え徹とほりなるおど
 腕うでと中ちゆう腕うでの間ま小こ給たま小こ包ほう如ごとく黒くろく圓まるき物もの或ある昇あがり或ある降くだるおと安あん祿ろく山さん隆りゆう昌ちやう女にょ胎たい中ちゆうハハ及およど腹はら中ちゆうの臟ちゆう腑ふまで残のこる隈かまもなく見え徹とほりなるおど
 女にょ其その石いしを吞く隱いんしる胎たい中ちゆうハハ及およど腹はら中ちゆうの臟ちゆう腑ふまで残のこる隈かまもなく見え徹とほりなるおど
 針はりの席せき小こ坐ざする心こころ地ちなる吉きち備びん公こう鏡かみ向むか小こ衣い服ふく懐くわい中ちゆうハハ及およど腹はら中ちゆうの臟ちゆう腑ふまで残のこる隈かまもなく見え徹とほりなるおど
 人ひとの胎たい中ちゆうハハ及およど腹はら中ちゆうの臟ちゆう腑ふまで残のこる隈かまもなく見え徹とほりなるおど

甘りと覺内縮小色一如く見ぬる則ち胞衣より彼胎家未分鈔婦人懐胎の如く夫の
 籍液母胎小入む其形も圓團とて其色黒し是故阿羅印と号す七日七夜おと変
 たる後河浮曇と号すと有今婦人の胎内小なる物子腫小相違有へずされば社
 覓る身も鏡小向へ更を厭れ八懐妊せしと耻ての義ありん女の子腫と宿せざる常の
 更おてさの恥も更らんと微笑してやられを隆昌女吉備公の仁心骨身小微りて忘
 ると喜涙小袖を沾りて身緑山懐胎の論を信せられぬ女石と吞隠せし一決す
 時公玄東が肩とある義お心付吉備公の儀論小任せ基石八葉違おたりて空舟駈奎の義を
 後日の沙汰小とすと更落者一々れを玄東隆昌女八毒蛇の口と免まし心地一胎更限
 時小玄宗帝吉備公小ち向へし其基の勝肩互角おれを双方得失なり先今日旅館へ帰
 られし曆書の義ハ絆緘の上おて更と定むるを宣ひるる又吉備公承仕ありて宮中と
 退出し鴻芦館へ歸られれを諸大臣玄東夫妻も皆脚暇と給り各王宮を下げり

皇統記圖會前篇卷之三畢

名古屋 大曾根 矢野平兵衛藏版畧書目

增註十八史略	七冊	小學讀本	四冊	尾張明細圖	一冊
四書集註	十冊	同字引	一冊	改正 <small>増補</small> 早引節用集	一冊
大學	一冊	農家小學	一冊	東春井郡地誌略	一冊
中庸	一冊	日本畧史	二冊	同地圖	一冊
論語	四冊	小學入門教授法	一冊	唐詩選	一冊
孟子	四冊	明治用文章	一冊	小倉百人一首	一冊
古文孝經	一冊	幼童必携	一冊	四書字引	一冊
人民必携	公用文例	一冊	日用塵功記	一冊	道二翁道話 <small>近五冊</small>
日用必携	證書文例	一冊	府縣郡名録	一冊	說教道話 <small>近六冊</small>

